

## 一、遺跡の位置と環境

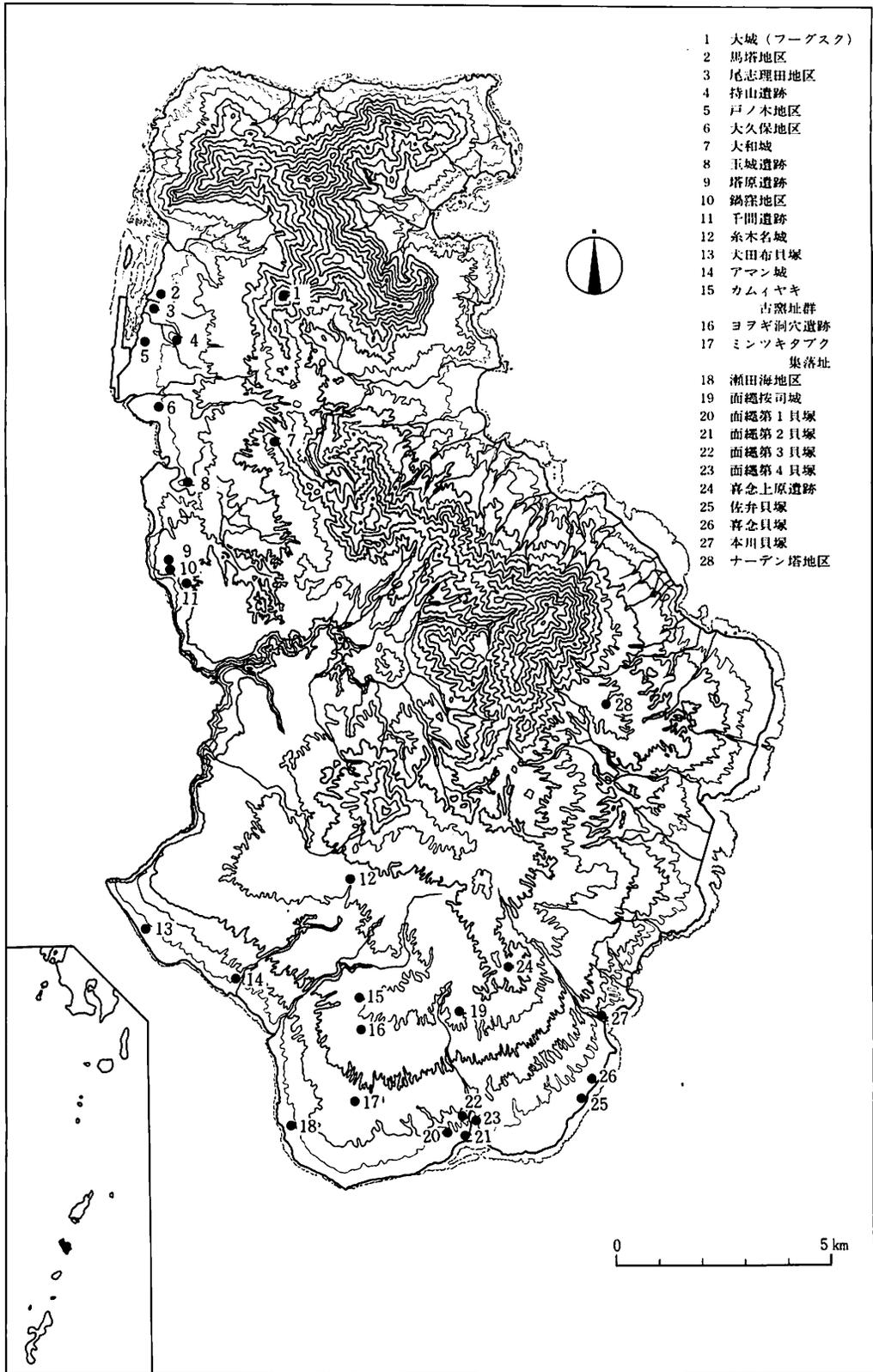
<sup>タマグスク</sup>玉城遺跡は、鹿児島県大島郡<sup>アマギ</sup>天城町大字<sup>マゼナ</sup>天城字真瀬名2646—1に所在する。

鹿児島から南西方向に薩南・<sup>トカラ</sup>吐噶喇・奄美・沖縄・宮古・八重山と島々が並び、台湾と九州を結ぶ掛橋のような形になっている。一般に南西諸島と呼ばれており、文化や歴史の上では奄美・沖縄が南西諸島中部圏ともいうべき1つのグループを成している。玉城遺跡のある天城町は、その中部圏北半の奄美諸島徳之島にある。

気候は海洋性の亜熱帯気候であり、気温は1月でも平均15℃以上、降水量は年平均2,000mm程度であるが、台風の影響で年較差が大きく、1日400mm以上の集中豪雨も珍しくない。

植物相はシイを極相とする亜熱帯広葉樹林で、琉球松の林が広がりガジュマルの巨木が外来者の目をひき、集落近くや田畑の境界にソテツが並び、海岸砂丘にはアダンの茂みが続いている。植相は本土とは渡瀬線によって隔絶しており、特に徳之島は東洋のガラパゴスと渾名されるほど古相の種が保存されている。しかし、先史人の生活に有意義であったと思われる大型獣には乏しく、リュウキュウイノシシ1種があるだけで、これにつぐアマミノクロウサギの他はネズミ大以下のものばかりである。

島の中央は井ノ川岳<sup>イカワ</sup>（標高644.8m）を主峰とする山々が南北にはしり島を東西に分けている。その東側を徳之島町が、その西南部を伊仙町が占め、西側を天城町が占めている。いずれの地域も海岸に向って、緩やかに傾斜した段丘が広がっているが、東及び南は隆起珊瑚礁の発達が著しく、特に伊仙町の海岸部は魚介類の採取に適した平坦な珊瑚礁原が広がり、著名な面縄遺跡群成立の要因の1つを成したと考えられる。これに対し、西側すなわち天城町の海岸南半は汀線近くに20～100mに達する琉球石灰岩の断崖が続いているが、その上面は比較的平坦な土地の広がりを見せ、遺跡の立地に好条件を提供している。北半は全体に西へ傾斜した低平な地形で、汀線の彼方には礁原が断続的に広がっており、その礁原の生産力に依存する形での遺跡の成立を可能にしている。事実、調査の進展に伴ない、天城町各地で遺跡が確認された。千間遺跡<sup>センマ</sup>・塔原遺跡<sup>トウバル</sup>等がそれであり、馬塔<sup>マトウ</sup>（前野）地区・尾志理田地区<sup>オシリダ</sup>・戸ノ木地区<sup>トノキ</sup>・大久



第1図 徳之島主要遺跡分布図

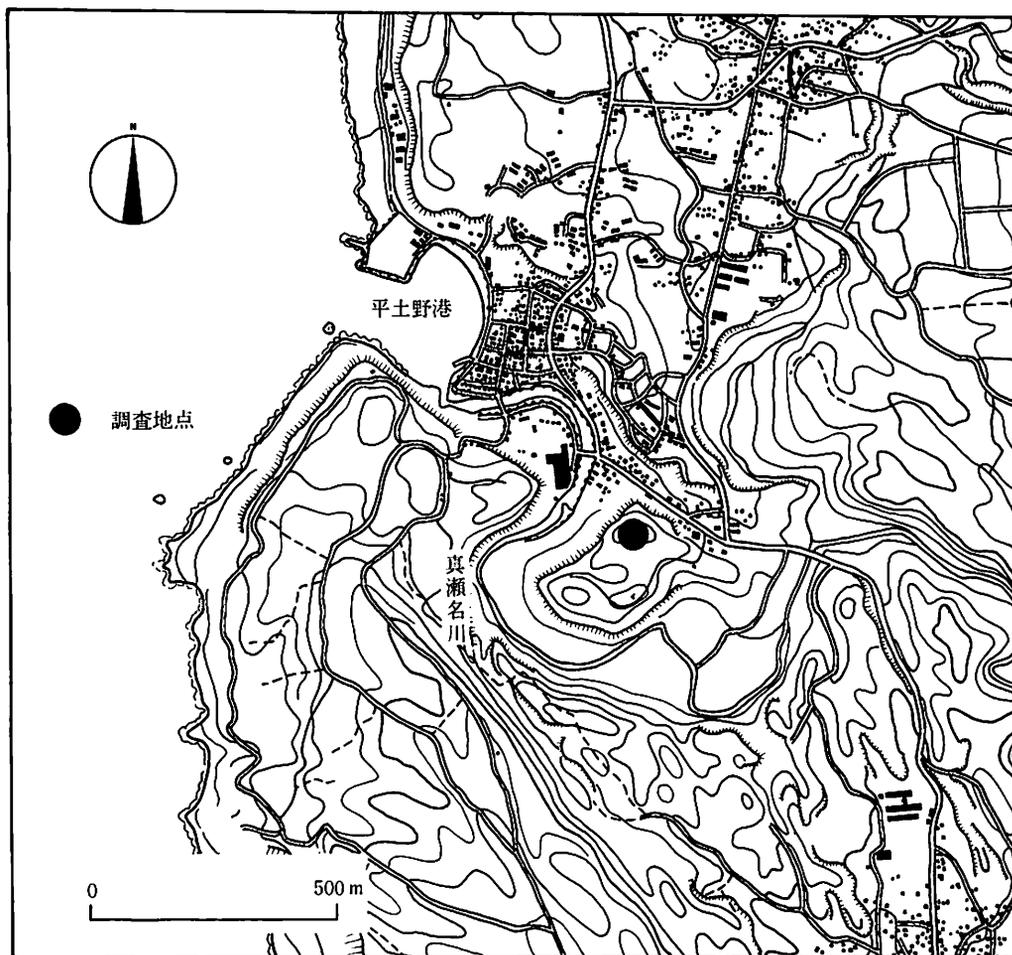
保地区等の地点からも遺物が採集されている。

今回調査を行なった玉城遺跡は、大和城山（<sup>ヤマトグスク</sup>標高251m）から西海岸に延びる丘陵の先端に位置する。付近は丘陵が海岸に迫り、平野部は真瀬名川の河口部にわずかに広がるだけである。遺跡の立地する台地は、北東—南西方向に長いびつな方形を呈し300×190～200m程の規模をもつ。北東側を県道に切られ、その他は、真瀬名川が取り囲むように流れており、川が開析した低地からの比高は40m程であり、周囲から独立した地形になっている。真瀬名川の流路は深い湿地であるうえに、四周が崖であったので玉城に接近するのは容易でなく、現在の県道側にただ1ヶ所の登攀可能部分があっただけという。東側の丘陵と玉城とは県道で区切られた形になっているがグスクの性格の解釈に関し、この切れ目が自然地形か人工の切り落としであるか大いに気がかりである。伝承等によればこの切れ目の幅が狭かったことは認められるが、人為的なものであるとする積極的な証査は見出し難い。なお、グスク（城）の呼称は、かなりの広がりをもつこの台地全体を指すものであって、発掘地点だけを指すものではない。また、字名が城でなくて真瀬名であるのは、地籍作成の際にグスクの呼称を自分の土地に冠することを地主たちが遠慮したためという。

調査地点は台地の北端、最も標高の高い所（標高40m前後）にある。大型整地機械類の導入に伴ない、調査地点とその南側約100mの所にあるノロ墓並びに四周の崖地を除き、旧態をとどめない程に削平され、調査地点は一段高く、ノロ墓は塔のように聳えた状態でとり残されている。調査地点の西南側に谷の入り込みがみられるが、大がかりに埋め立てられており、以前には谷頭の縁に多量の焼きものの片が散乱していたという。目撃者の談を総合すると大半はカムイヤキ窯系のものようである。この一帯が大がかりな人文の跡地であることが察せられる。

ノロ墓はほとんど点のような状態で残存しているにすぎないが、調査地点は面を維持して残存した唯一の地点である。地形の変革が始まる以前から平坦な疎林であり、最近のキビ作りのために均されたとしても、10～20cmの変化に過ぎないともいわれる。また平坦部のほぼ中央に西北—東南にはしる20cm程の段があって、以前は北東側が高かったが、今は一様であるという意見もある。いずれにせよ、大きな変革はなかったものと判断される。（第1～3図）

（坂井）



第2図 調査地付近の地勢

## 二、調査の概要

### 1. 調査の目的と経過 (第3・4図)

南西諸島が土器と石器の生活を克服し、農耕の技術と家畜と金属を手に入れて、国家の建設に向って激動するちょうどその頃、「グスク」が成立する。したがって「グスク」の解明は南西諸島史解明の最重要問題の1つである。多くの研究者が、その性格をめぐる論争を展開した。<sup>註1</sup> 沖縄方面には300に近いグスクがあるといわれ、グスクへの関心も高く、発掘調査も早くから繰り返された。<sup>註2</sup>

しかし、奄美方面ではグスクへの関心は沖縄ほどには表面化しなかった。「グスク」の地名そのものが少なかったことと、石垣の城壁等の人目をひく施設が、与論島以外では皆無であり、研究の手掛りを掴みにくかったこと等も、その原因である。しかし最近になって、奄美史についても、按司屋敷伝承地等のグスク相当遺跡の調査なしにその歴史を編むことが困難なことが改めて自覚されはじめ、文化庁の全国的な中世城調査による刺激等もあって、抽象的な議論だけではなく具体的な研究への動きが出てきた。一昨年12月に笠利町歴史民俗資料館で開かれた鹿児島・沖縄の両考古学会の合同討議の主題の1つもグスクの問題であった。<sup>註3</sup>

玉城遺跡の調査は、直接には以上のような研究の流れの中で、南西諸島史解明を目的として計画されたものである。しかし、一方にはグスクの最高所の平坦面がほぼ旧状を維持したまま残されている例が稀少であるという現実がある。つまり、島々で進んでいる土地の削平及び耕地化も調査の実施を急がせた理由の1つである。調査は、専攻学生の実習調査として実施された。したがって調査の目的は諸島史解明の資料を得ること、遺跡の保存、学生の訓練の3点であった。

調査は、1985年7月12日より23日まで、天城町教育委員会と遺跡の地権者及び付近住民の、調査自体から生活面にわたる強力な援助態勢の下に実施された。調査の完遂は、全面的にこれらの諸援助に負うものである。

調査は、まず発掘予定地のサトウキビの伐採を行ない、次に遺跡全体に4m方眼のグリットを設定し、南から北へA・B・C……の符号を、西から東へ1・2・3……の番号を付した。まず、発掘予定地へ登る農道に接し、農道の切り通しによって遺物包含層の状況がある程度把握されていたB-4・5、C-4グリットを発掘した。その後、遺構の広がり方を考慮して、C-3、D-3、B-3グリットに、調査区を順次拡張した。その結果、B-5グリットの東隅から、4号遺構が検出され、また、B-5グリットからB-4グリットにかけて、3号遺構が検出された。更に、B-3・4、C-4グリットからC-3グリットにわたって、2号遺構が検出された。C-3、D-3グリットにかけては、1号遺構が検出された。一方、玉城遺跡の発掘調査と並行して、付近の聞き込み調査と、徳之島内の踏査を行なった。

なお、調査への直接参加者及び調査協力者は下記の通りである。



第3図 地形測量図

## 調査参加者

白木原和美 甲元眞之 馬原和広

西谷 大 (大学院2年次生) 友口恵子 (大学院1年次生)

岡 美詠子 木島慎治 小山智宣 坂井義哉 廣松秀子 藤崎周太郎 保永朋史

(以上3年次生) 網田龍生 岩崎充宏 上田隆史 隈部敏明 国見直樹 仲秋

直樹 野中鉄也 藤井 郁 横井久雄 吉内素子 (以上2年次生)

## 調査協力者

義 憲和 吉岡武美

発掘調査は甲元助教授の指示のもとに馬原、西谷が全体の指揮をとった。発掘終了後の室内調査は、平 俊隆 (大学院1年次生)、斉藤康子、松本玲子 (以上3年次生) も参画して、全員で行ない、1月以降報告書の執筆にとりかかった。報告書の編集は馬原、友口が担当した。 (廣松)

註1 仲松弥秀「グシク考」『沖縄文化』第5号 1961

嵩元政秀「“グシク”についての試論」『琉大史学』第1号 1969

国分直一「“グシク”をめぐる問題」『南島考古』第1号 1970

嵩元政秀「再び“グシク”について」『古代文化』第23巻第9・10号 1971

仲松弥秀「再“グシク”考」『南島考古』第3号 1972

註2 琉球政府文化財保護委員会「勝連城第一次発掘調査報告」 1965等

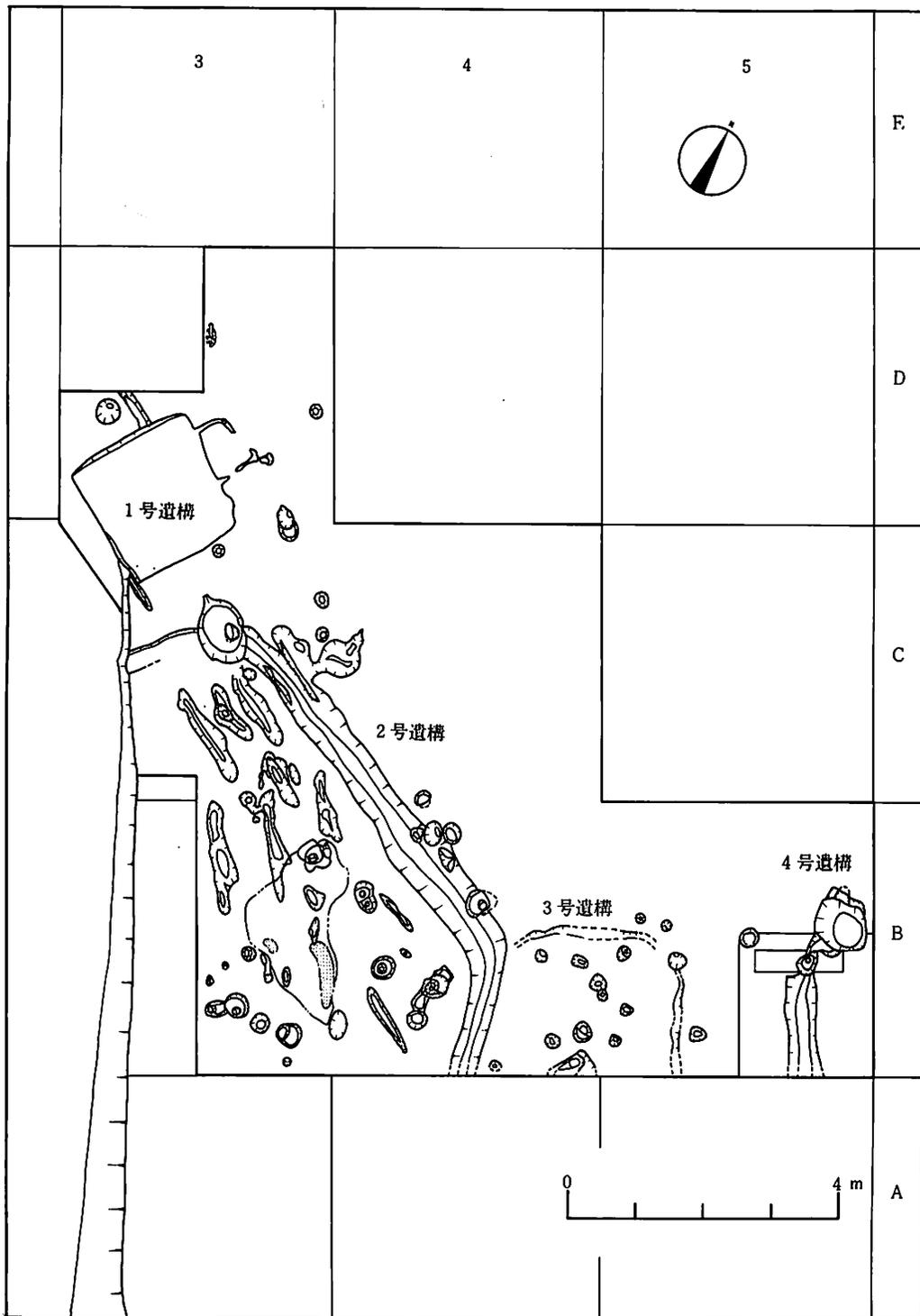
註3 知念勇「奄美のグスクについて」『鹿児島・沖縄考古学会合同研究発表要旨』 1984

## 2. 層 序 (第5図)

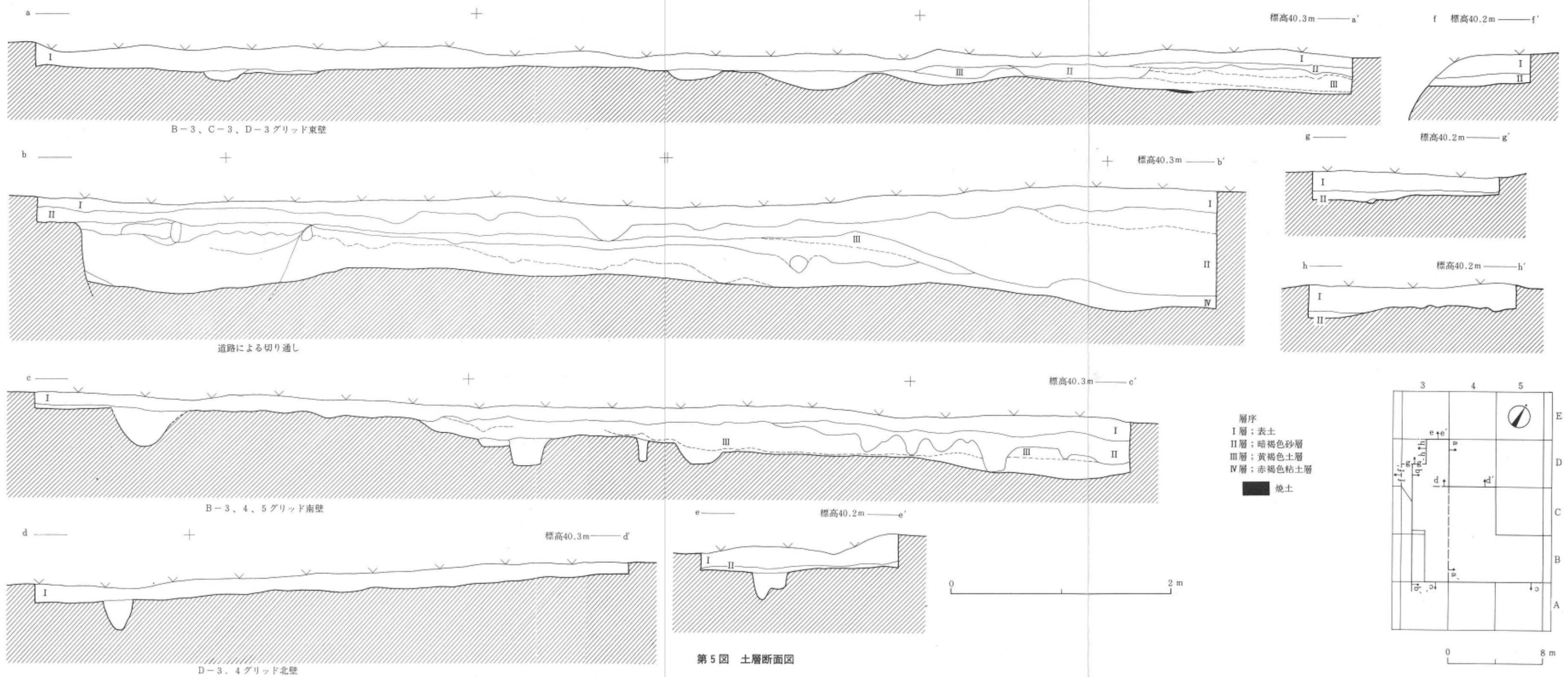
玉城遺跡の西側は道路によって削平されており、この部分で明確な遺構を含む当遺跡の層序断面が観察された。遺跡の立地する小丘陵は北東側から南西側へ傾斜しており、層も南西側へ傾斜している。(第3・5図)

I層 厚さ8~22cmで褐色を呈する耕作土である。

II層 暗褐色を呈する砂質土層である。B-3・4、C-2・3・4の各グリッドで認められたが、攪乱層である。この層からは、カムイヤキ窯系陶片・磁器片が出土する他、ビニール片・比較的最近のものとみられる染付片も出土している。この層は



第4図 遺構配置図



第5図 土層断面図

特に遺跡西南部で厚く、部分的に人為的な砂のブロックを含んでいる。Ⅱ層は畑を整地した際に埋め込み等によって急速に堆積した層と思われる。

Ⅲ層 厚さ5～30cmの締りの良い黄褐色土層である。上面は攪乱を受けている。B-3・4・5グリッドで認められ、カムイヤキ窯系陶片・磁器片・土器片が出土する。1～4号遺構は本来この層から掘り込まれていたと思われるが、掘り込みの肩の部分が整地の際に攪乱・削平されているため、明確な状況は不明である。

Ⅳ層 赤褐色を呈する粘土層であり、無遺物層である。上面は明赤褐色～暗黄褐色を呈している。  
(友口・保永)

### 三、遺 構

今回の調査では第Ⅲ層から第Ⅳ層にかけて掘り込まれた遺構が4組(1～4号)検出された。各遺構は北西から南東にかけてL字形に並んでいる。発掘区の北西隅に1号遺構が位置し、その南側に2号遺構が、2号遺構の東側に接するようにして3号遺構が並んでいる。更に、東隅に4号遺構が位置している。(第4図、図版3下～4)

#### 1号遺構 (第6図、図版5～6上)

1号遺構はC-3、D-3グリッドにまたがって検出された土壇及び周辺のピット群ですべて第Ⅲ層に属する。土壇は北東-南西の軸をもち、その平面形は一辺約1.8mの方形を呈している。土壇の深さは約1mで、壁は4面ともに垂直に近く、その全面に丁寧な整形の跡が認められる。隅や稜は鋭く整形され、底部は水平であり、土に掘られた造形物としてはその造りが特に均整である。土壇の周囲には深さ2～5cmの極く浅い4本の溝状遺構が検出された。土壇の北東辺には北隅より約30cmの地点から北東へ長さ約50cmの逆L字形の溝がはしり、これと対称する形で西へ、約80cm離れたところに同様のL字形の溝が存在する。後者の溝の南西端は土壇の北東辺の肩と接していない。この2本の溝とは別に土壇の北西辺には長さ80cm、幅20cmの溝が北西方向に延びている。また、土壇の南隅では長さ50cm、幅10cmの溝が南東方向に延びている。

土壇内の覆土は9層に分層された(第1～9層、第6図)。土壇の縁から20cmまでは第1～6層に分層され、いずれも層の厚さは薄く、土色は褐色～黒褐色を呈している。

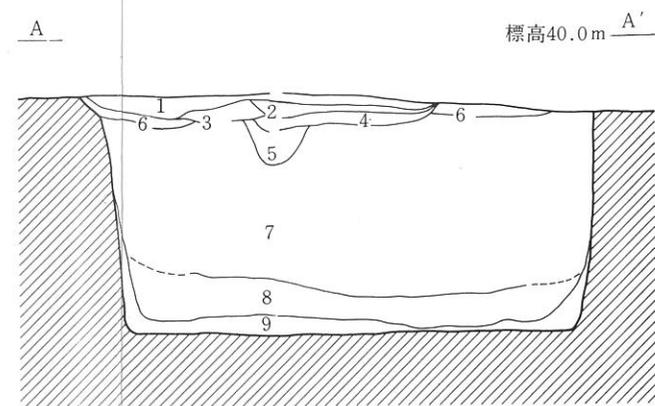
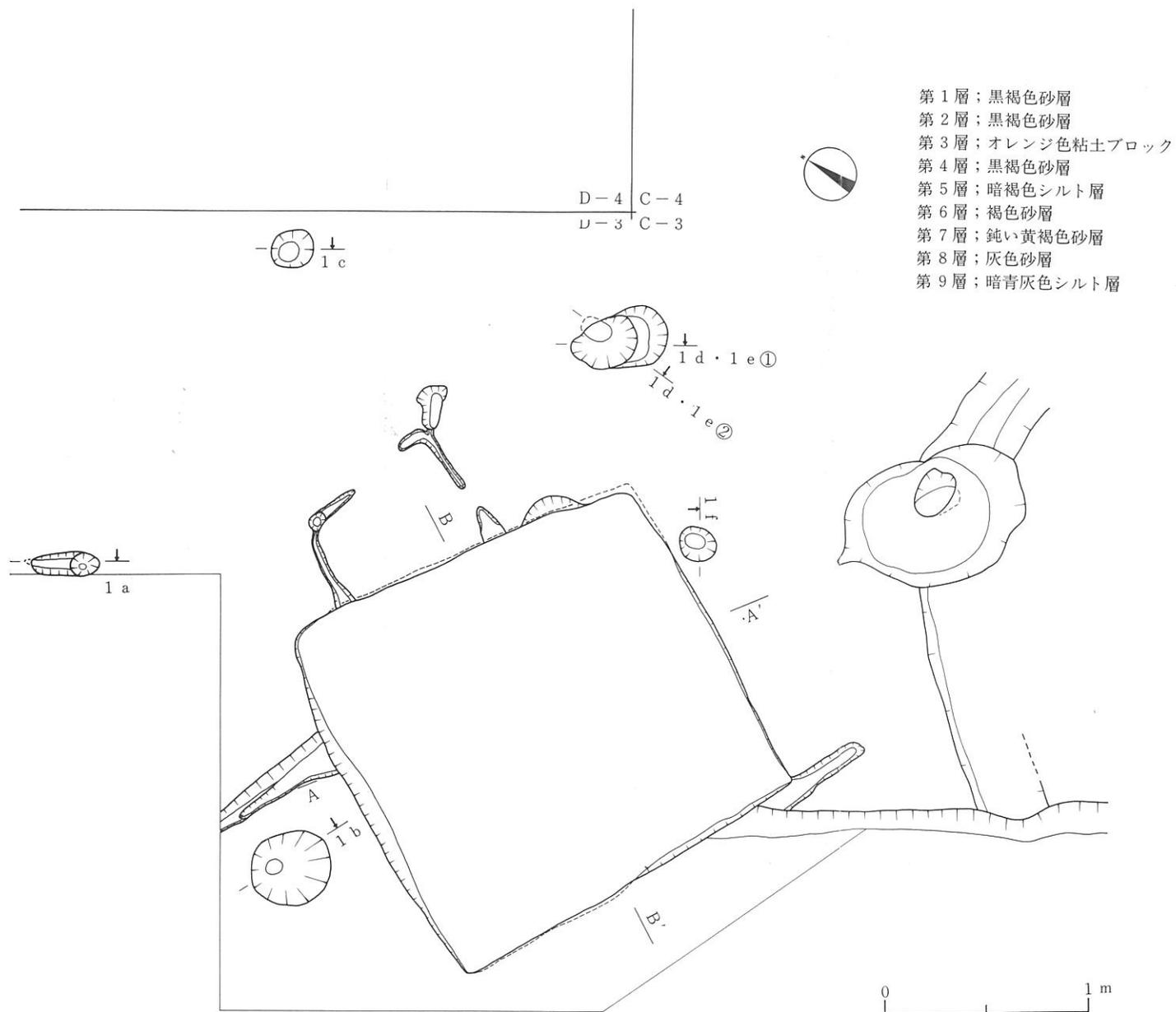
ただし、第3層はオレンジ色の粘土ブロック状のものである。第7層、第8層は両者とも厚くわずかに中凹みしながらほぼ水平に堆積する。特に第7層は80cmの厚さがある。土色は第7層が鈍い黄褐色、第8層が灰色を呈している。以上のことは土塚がその初期に急速に四周からの流入土で埋まり、やがて数次の押圧・攪乱を受けながら現状に至ったことを示している。しかし、最下層である第9層は状況が異なる。粒子は極めて細かく強度の粘性を有し、暗青灰色を呈しており、側壁中央部より底部にかけて鋸形に薄く堆積している。しかも図示の通り、第8層は第9層の最高部より低いところから堆積している。これらの状況は、第8層以上が流入土で形成されたのに対し、第9層は粘土を多量に含んだコロイド状の層が序々に水分を失って形成されたものであることを示している。

ピットはこの土塚の西側に2基、東側に4基検出された(1a～1f、第6図)。1aピットはその平面形が南北に長い楕円形を呈し、長径30cm、短径10cmである。北側は深さ13cmであるが、南端では更に12cm程深くなっている。残り5基のピットは、みなその平面形が円形を呈しており、それらの直径は15～40cm、深さは15～50cmである。このうち1bピットは特に大形である。また、1eピットは1dピットに切られている。ピットの傾きは1b・1c・1fピットがほぼ垂直に立っているのに対し、1dピットはその中心軸が南へ約30度傾いている。

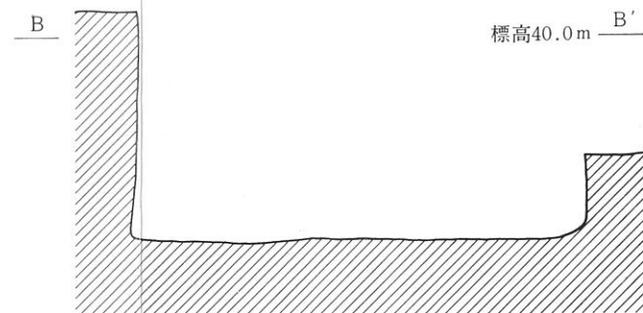
1号遺構からは、カムイヤキ窯系の陶片・青磁片・白磁片・土器片等が出土した。これらの遺物は土塚の第7層と第8層から集中して出土しており、特に土塚中より出土したカムイヤキ窯系の陶片は当遺跡より出土したカムイヤキ窯系の陶片出土量の7割を占めている。なお、土塚の第7層と4号遺構から出土したカムイヤキ窯系の陶片とは接合関係にある(第11図20)。

## 2号遺構 (第7～9図、図版6下～11上)

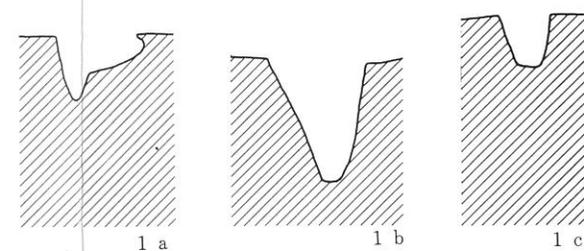
2号遺構はB—3・4、C—3・4グリッドにかけて検出された遺構で、ピット群・数条の溝・焼土・ピットを伴う掘り込み及びこれらの遺構を取り囲んでいる溝状遺構等により構成される。溝状遺構及びその内側の遺構には、やや締った粒子の細かい黒色を呈する覆土が、厚さ約1～20cm程堆積しており、その堆積は南西部で厚くなっている。この覆土は、部分により土色・土質が異なるが、1号及び3号遺構の上面



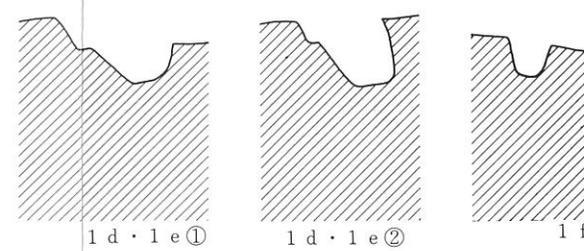
土壌土層断面図



標高40.0m



標高40.0m



1号遺構ピット断面図

第6図 1号遺構実測図

にも及んでいる。

溝状遺構は、第Ⅲ層から第Ⅳ層に掘り込んで作られており、全長9.2m、幅約65cm、深さ約15cmで、東側より西側の方が低くなっている。断面は、浅いU字形で、その内壁は滑らかでしかも汚染の少ないことが注目された。この遺構は、内側にピット・数条の溝・焼土・遺物群等を取り囲むように2ヶ所で屈曲しており、全体の平面形は多角形を呈すると推測される。ただし、この遺構の北西部は掘り込みの肩が不明瞭である。(第7・8図)

溝状遺構の内部には覆土の上面から、数条の溝・焼土・ピット群が検出された。ただし、この覆土は溝付近では灰混じりの灰褐色土、またB-3グリッド南西部の焼土付近では炭混じりの黒色土である。(第7図)

溝の平面形は長さ約0.9~1.6m、幅約20~30cmで、中央部がやや膨らみ、南西-北東方向に細長く延びている。深さは約10cmで断面は皿状を呈する。特に、その配置は3条の溝がほぼ等間隔で平行に並んだ形をとり、溝内に充填されていた灰褐色土は、周囲の覆土に比べ、かなり軟らかいものであった。

溝状遺構内部中央では焼土が2ヶ所確認され、1つは長さ約2m、幅約20cmの細長く延びるもので、もう1つは長径約20cm、短径約5cmの楕円形を呈するものである。この焼土は硬化しており赤褐色を呈する。その周囲には、遺構覆土である炭混じりの黒色土が広がっており、その形状は長軸約2.7m、短軸約1.2mの不定形を呈し、2~3cmの厚みをもつ。この他に、焼土付近からは深さ2~3cmの浅い掘り込みが3ヶ所、小児頭大の火を受けた石が2個検出された。(第7図)

溝状遺構内南西部の遺構覆土を取り除き、本来の床面を検出したところ、掘り込み及びピットが確認された。掘り込みの平面形は、検出部では、1辺が約1mの方形を呈するが、全体の平面形は明らかでない。深さ約10cmで、断面は皿状を呈する。また掘り込み内にはピットが検出された(20ピット)。ピットの平面形は径約30cmの円形を呈し、深さは約30cmである。更に、この掘り込みの北東部で、重さ1~2gの指頭大の黄褐色の塊状粒の広がりが検出された。この広がりは長径約3m、短径約1.5mの楕円形を呈している(第8図)。更に、道路切り通しの第Ⅳ層に円形を呈する部分が認められ、位置及び層序的にみて、この遺構との関連性が考えられるが、その性格は

不明である。なお、時間上の都合により、極く一部の覆土を残しており、本来の床面を完全に検出するには至らなかった。

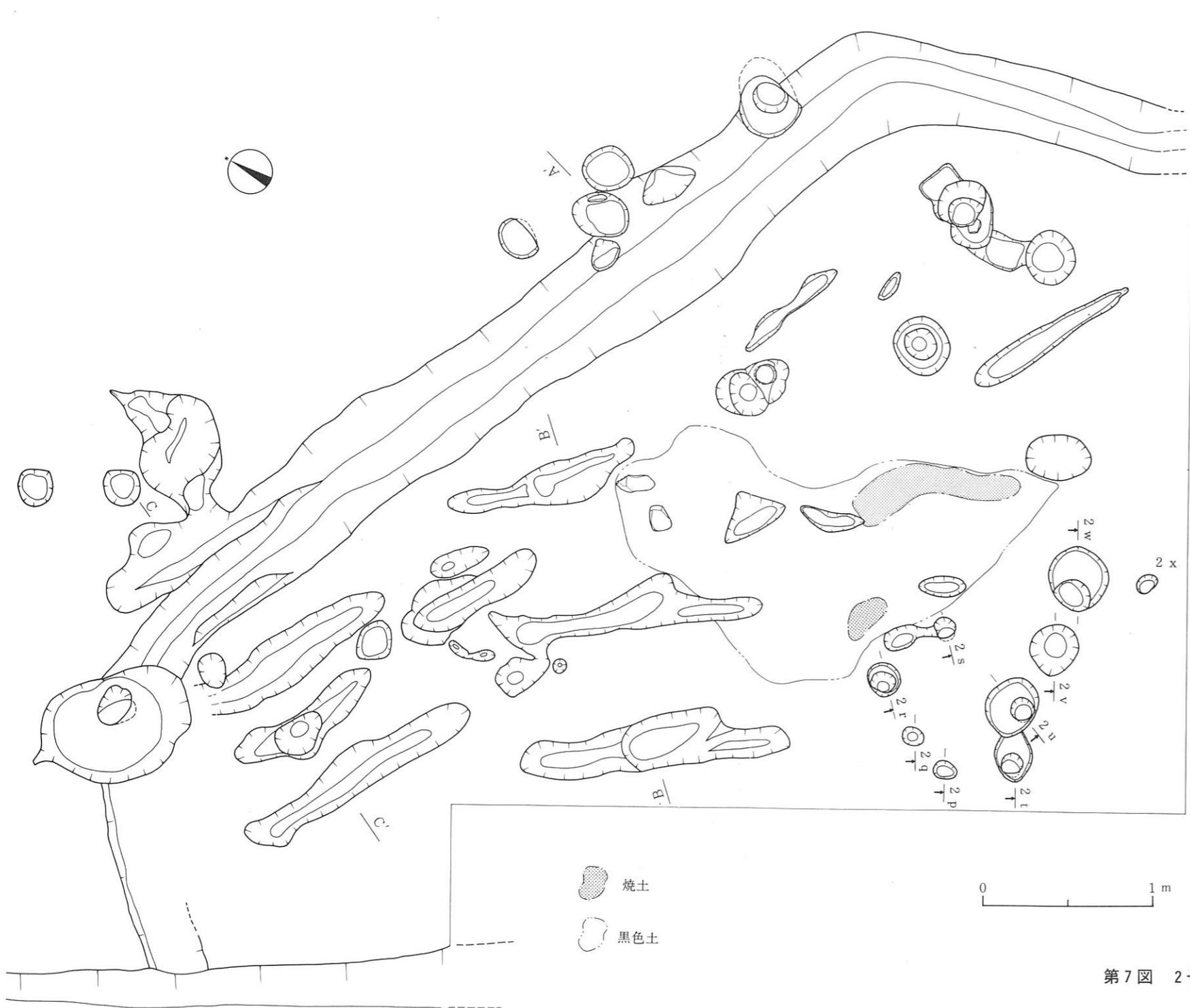
これらの内部遺構に伴ない、多数のピットが検出された(2a～2x)。これらピットは、覆土上面から検出されたもの(2p～2x)と遺構床面から検出されたもの(2a～2o)の2種類に大別でき、ある程度の時期差が考えられる。まず、覆土上面から検出されたピットは9基(2p～2x)である。これらのピットの平面形は、径約10～45cmの円形を呈する。これらのピットのほとんどが焼土の方向にやや傾斜しており、その中の4基(2r・2t・2u・2w)は、まずピットを掘り込み、更にその底面に別のピットを掘り込んだ2段の構造をもっている。(第7図)

遺構床面から検出されたピットは、全部で15基(2a～2o)である。溝状遺構北東部外側で検出された6基のピット(2d～2i)は、直径が約20～30cmの不整形円形あるいは楕円形を呈する平面形をもつ。深さは10～45cmである。2eピット及び2iピットは2段の構造をもち、2fピットの壁面には、長さ10cm程の楕円形の礫がみられる。これら6基のピットはほとんどが溝状遺構内部の方向へ傾斜している。また、溝状遺構北部外側には2基のピット(2b・2c)が検出された。溝状遺構内部では、6基のピット(2j～2o)が検出された。これらのピットの平面形は、径30～50cmの円形あるいは楕円形を呈する。2段の構造をもつものは4基(2j～2m)である。特に2mピットの内壁には拳大の礫がみられる。(第8図)

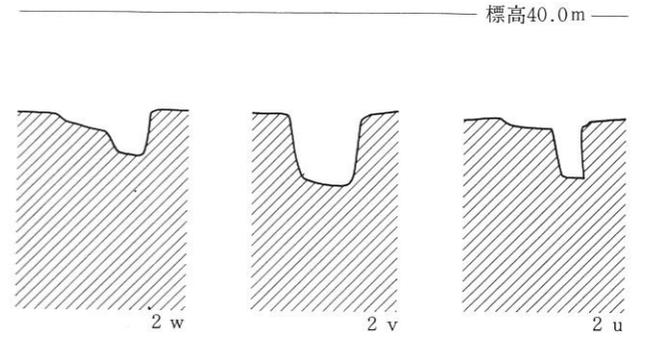
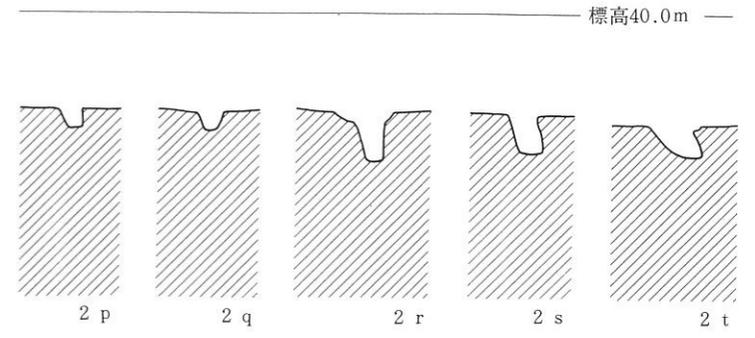
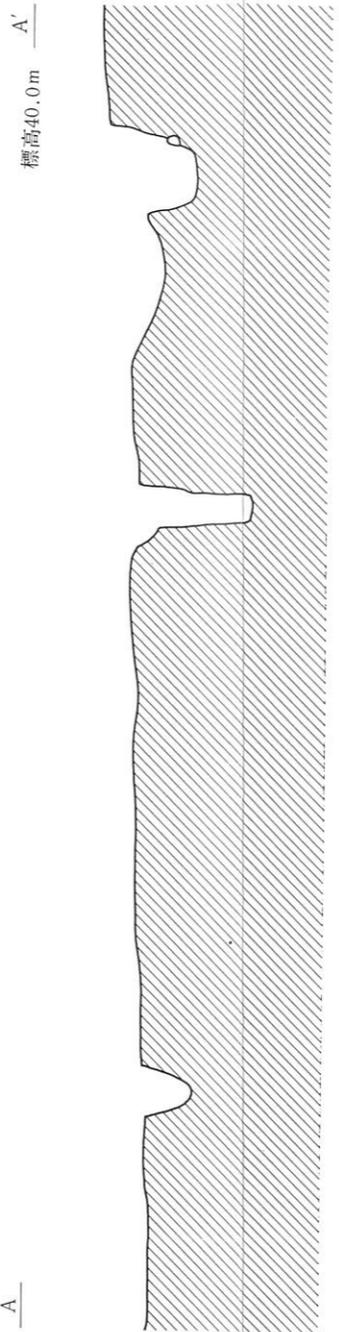
溝状遺構の北西部で、大形の2aピットが溝状遺構を分断するように検出された(第8図)。このピットの平面形は、長径1m、短径65cm程の楕円形を呈している。検出が進んだ段階で、このピットの中に複雑な切り合い関係を示す微かな土色の違いが認識された(第8図)。このピットは柱穴であると考えられるが、その構築過程は次のように理解された(第9図)。すなわち、2のように掘り方とそれに伴う柱穴が構築され、その後、この柱穴を再利用して5のように新たに掘り方と柱穴が構築されたものであろう。

2号遺構で検出されたピットの大部分は、柱穴である可能性が高く、切り合ったピットも多く存在していることから、この構築物の建て替え、修理が考えられる。

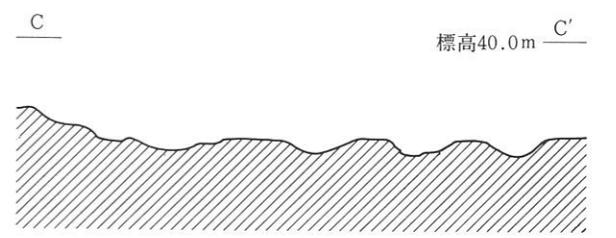
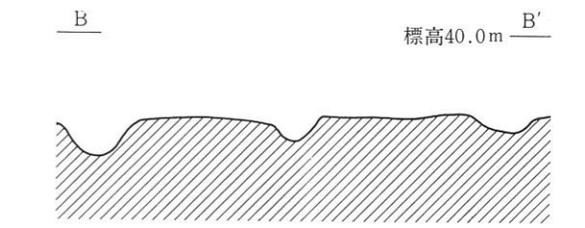
遺物は、溝状遺構底からカムイヤキ窯系陶片が貼り付いた状態で出土し、また、遺

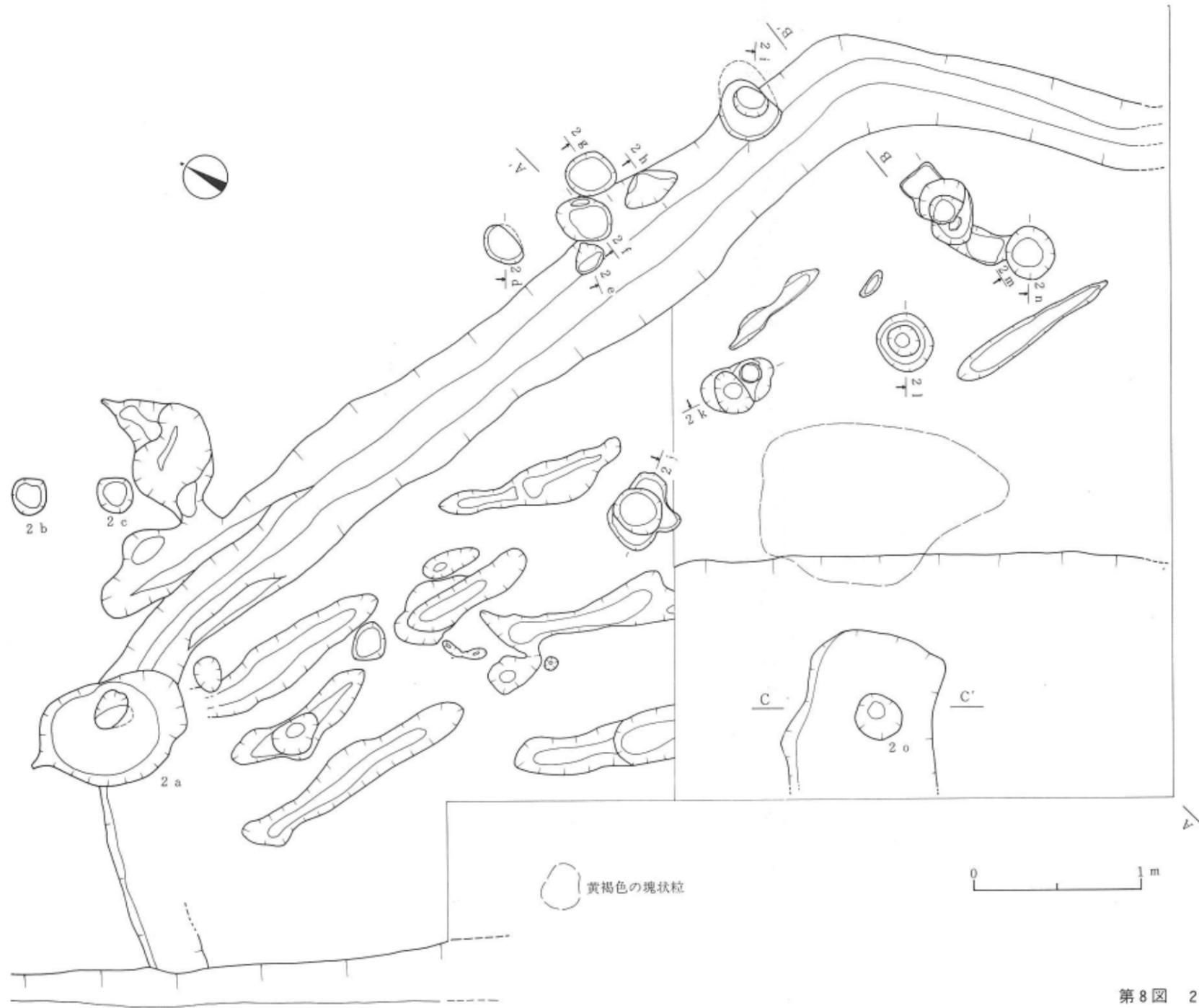


第7図 2号遺構実測図(1)

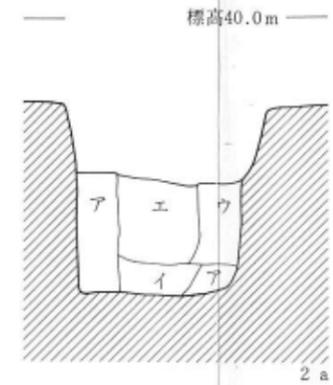
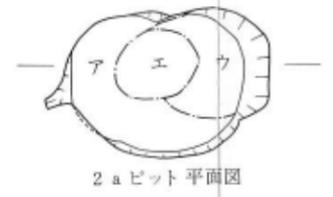
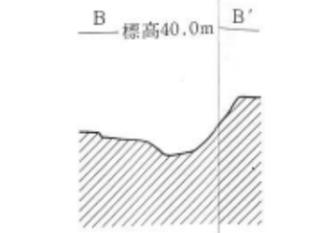
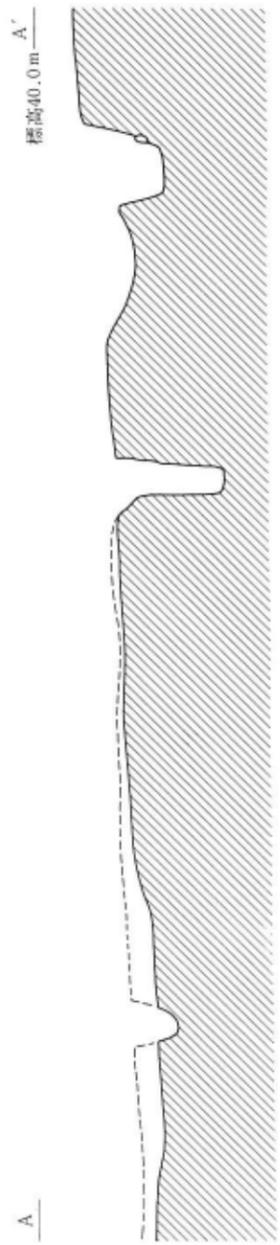


2号遺構ピット断面図

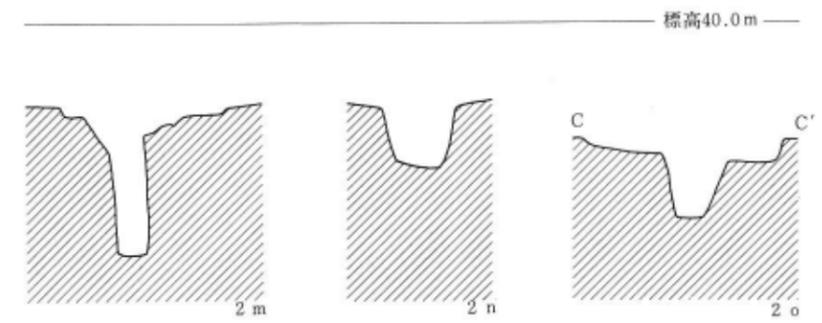
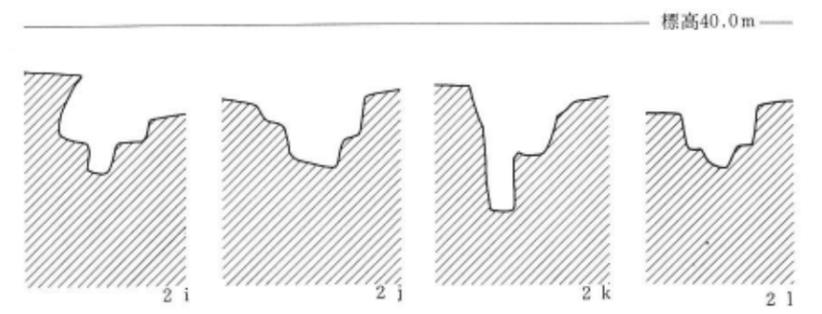
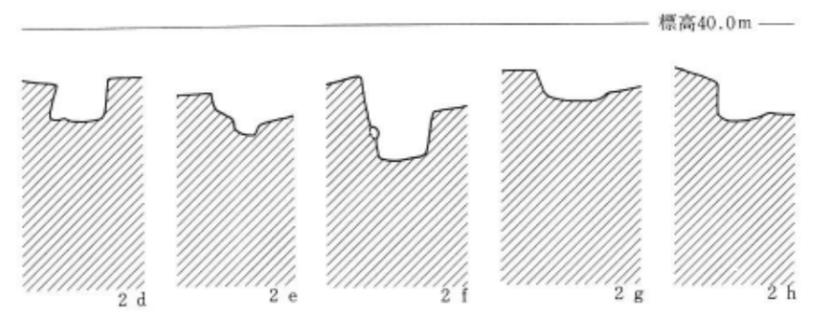




第8図 2号遺構実測図(2)

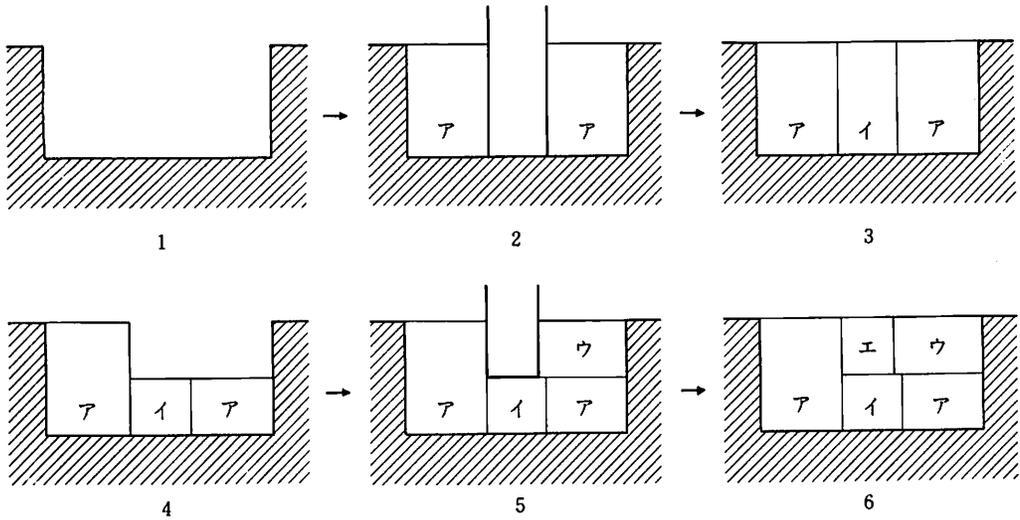


ア：黒色土混じりの赤褐色粘土  
 イ：黒色土混じりの暗褐色粘土  
 ウ：暗褐色土混じりの赤褐色粘土  
 エ：暗褐色土



2号遺構ビット断面図





ア；黒色土混じりの赤褐色粘土　イ；黒色土混じりの暗褐色粘土  
ウ；暗褐色土混じりの赤褐色粘土　エ；暗褐色土

第9図 2aピット構築模式図

構床面・2aピット及びその他のピットからもカムイヤキ窯系陶片・土器片・青磁片・白磁片が出土している。特に当遺構からは青磁片・白磁片の出土が多い。

### 3号遺構（第10図、図版11下）

3号遺構はB-4・5グリットで検出された浅い竪穴状の掘り込みとピット群である。これらの遺構はすべて第Ⅲ層から第Ⅳ層に掘り込まれている。掘り込みの南部は未発掘であるため全面の形は不明であるが、おそらくその平面形は長方形を呈するものと思われる。発掘された掘り込みの部分は北辺約2m、東辺約1.5m、深さ5～10cmの方形を呈している。掘り込みは極く浅いため、その肩は数ヶ所で不明瞭である。

ピットは掘り込みの内側に12基、外側に4基が検出された（第10図）。掘り込みの内側にあるピットは、その形状と位置の両者の関係から3種類に分類される。まず、大形のピット（3h・3i）が掘り込みの中央部付近に位置している。この2基のピットは、ピットを掘り込み、更にその底面に別のピットを掘り込んだ2段の構造をもつものであり、最大直径30～50cm、最深長35cmである。次に、これらを取り囲むようにしてやや小形で、浅いピット（3d・3e・3j～3n）が並んでいる。このピット群はいずれも平面形が円形あるいは楕円形を呈しており、断面形は皿状を呈している。ピットの直径は15～25cm、深さは10cm前後である。なお、3j・3kピットは切り合

っている。更に、このピット群の周囲にやや深いピット（3f・3o・3p）が点在している。これらのピットは平面形が円形、断面形がU字形を呈しており、ピットの直径は15～20cm、深さは15～25cmである。また、掘り込みの外側では4基のピット（3a～3c・3g）が検出された。ピットの直径は15～25cm、深さは10～40cmであり、平面形は円形あるいは楕円形を呈している。なお、当遺構より検出されたピットのうち、3bピットは南へ、3cピットは北へそれぞれ約30度傾いている。

遺物は3bピット底面よりカムイヤキ窯系陶片を使用した円盤状土製品が出土した（第14図70）。

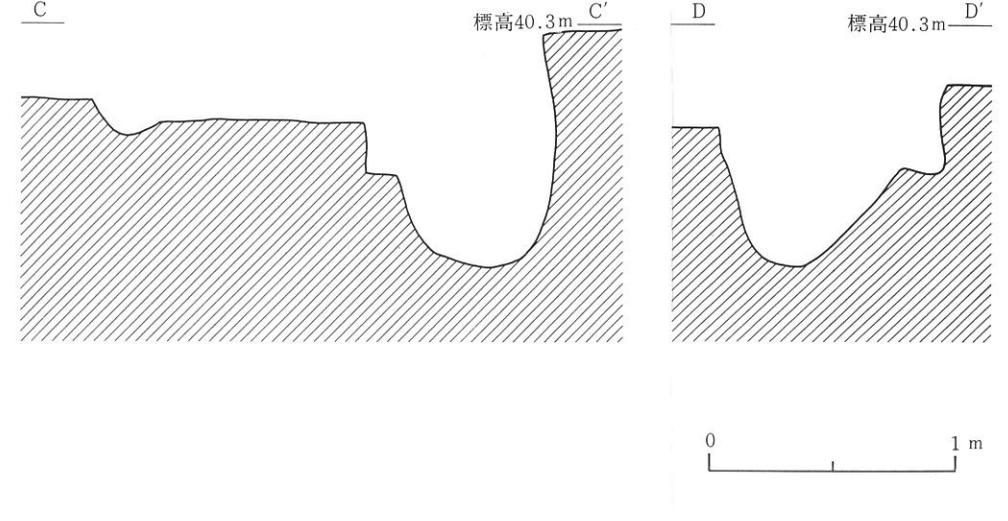
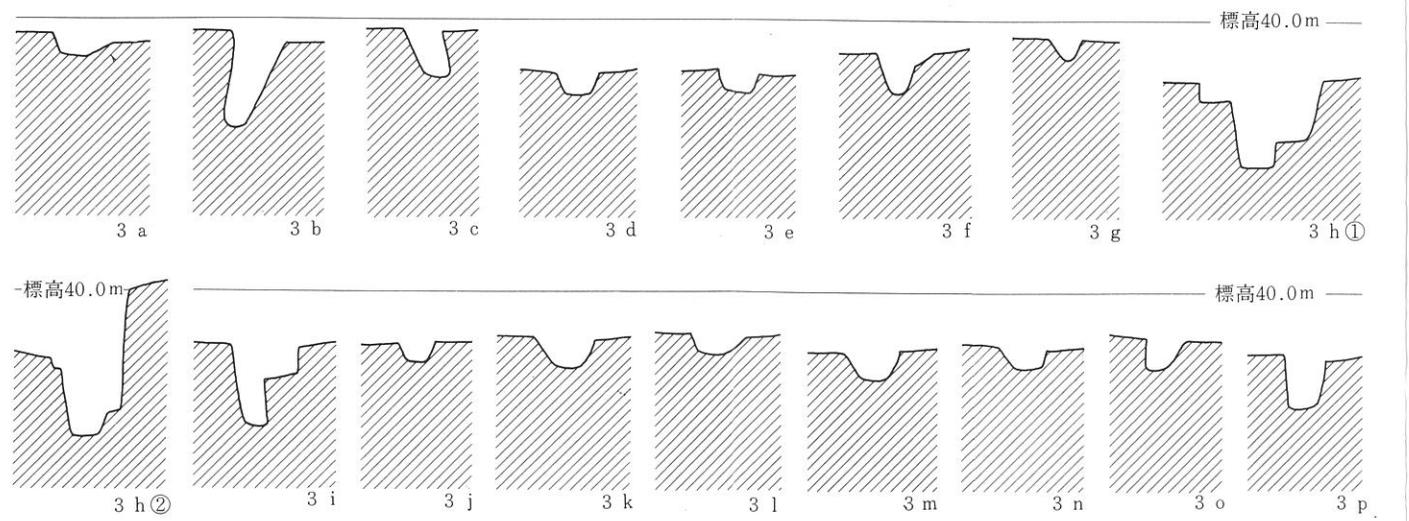
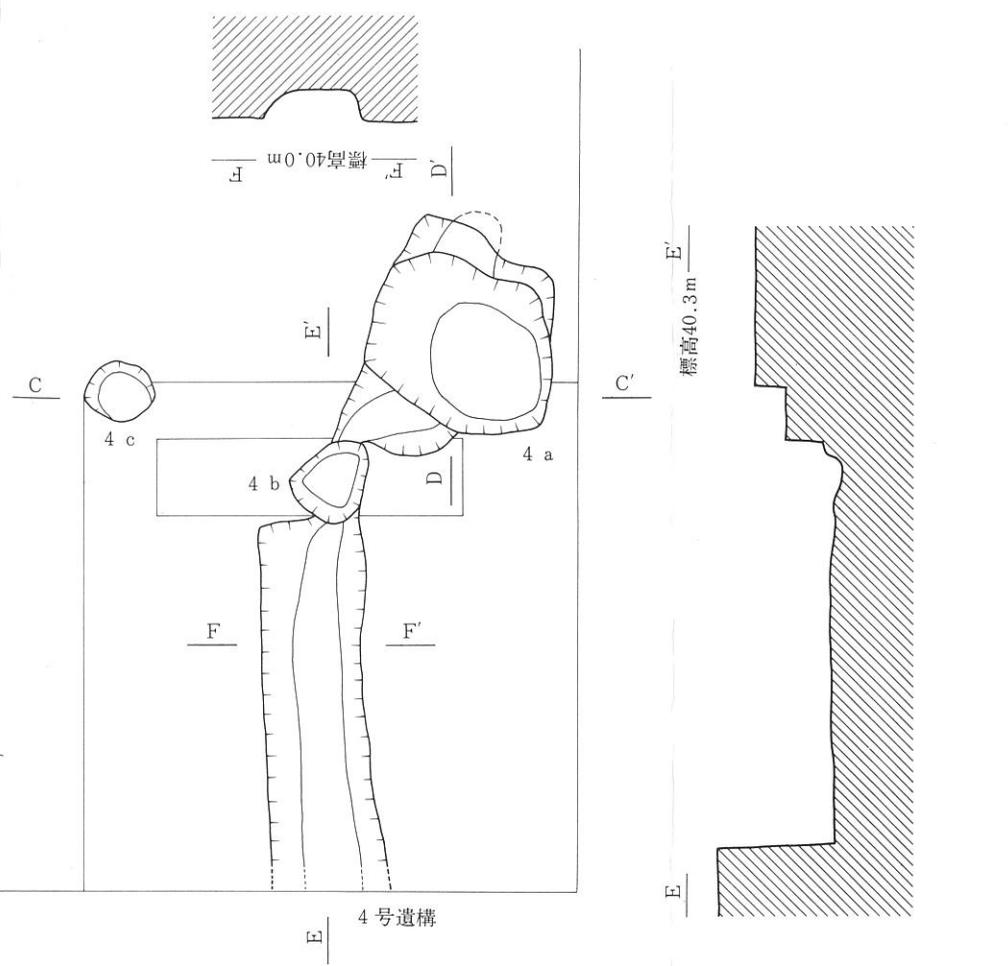
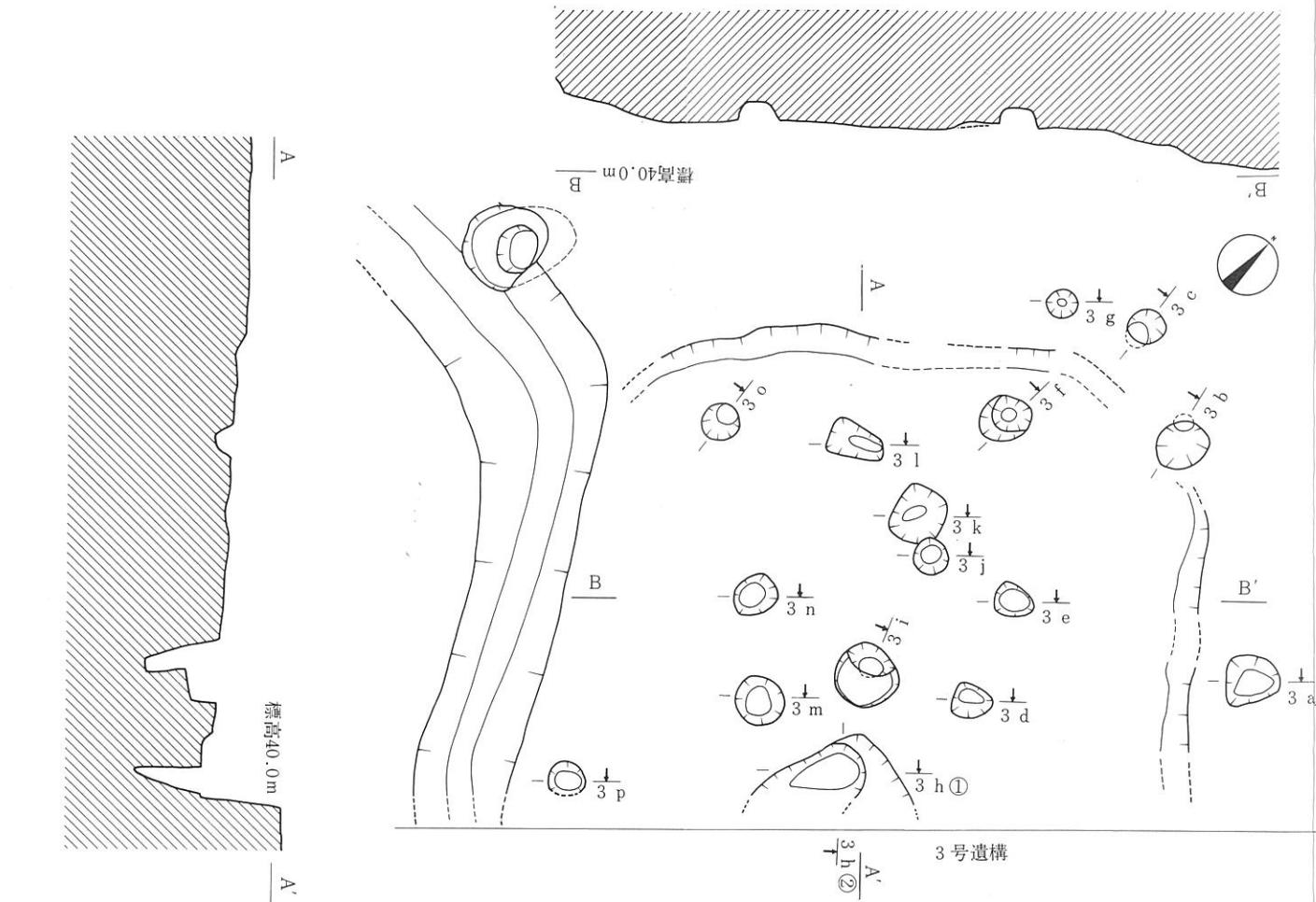
#### 4号遺構（第10図、図版12・13上）

B-5グリットでは第IV層上面まで削平されており、遺構の上面も破壊されていたため、その検出が困難であった。B-5グリットの南東隅に2×2mのトレンチを設けたが、遺構が明確にならず、そのトレンチの内部北側に更に1.5×0.5mのトレンチを設けた。その結果、溝状遺構と3基のピットが検出された。（第10図）

これらの遺構の関係は、南北に延びる溝状遺構の北端を切るようにして大形・小形のピットが位置し、それから西へやや離れて1基のピットが位置するという関係にある。溝状遺構の南部及び東部は未発掘であるため溝がどのように延びるかは不明であるが、発掘された部分の幅は40cm、深さは20cm、長さは1.2mであり、その断面形は皿状を呈している。そして、溝状遺構の北端は東へ緩やかに曲っている。

ピットは溝の北端に1基（4a）、このピットから南へ20cm離れたところに1基（4b）、これらのピットから西へ80cm離れて1基（4c）、計3基が検出された。4aピットはその平面形が楕円形であり、長径90cm、短径60cm、深さ70cmである。また4b・4cピットは直径約30cm、深さ10～15cmで、平面形は不整形円形を呈している。

当4号遺構は2号遺構北西隅部分と以下の点で類似している。第1点は溝状遺構が幅・深さ・断面形ともほぼ同一規模であることであり、第2点は大形のピットが溝状遺構を切断していることであり、第3点は溝状遺構がピットを境に2号遺構と同様に鈍角を有して屈折していることである。以上の点と4号遺構が未発掘部分に広がることとを考え合わせると、4号遺構の東・南側にも2号遺構と同様の遺構が存在する可能性が考えられる。



第10図 3・4号遺構実測図

4号遺構からはカムイヤキ窯系陶片・青磁片・白磁片・土器片・無釉陶器片が出土した。この無釉陶器片(第14図76)は4aピットの覆土中より出土した。

#### 各遺構の関係

1号・2号・3号遺構の上面には同一の覆土が広がっていること、1号遺構の土坑と4号遺構から出土したカムイヤキ窯系陶片が接合されたことから、これら1号～4号遺構はほぼ同時期に存在していたと推定される。また、1号～3号遺構には切り合ったピットが存在していることから、遺構が長期にわたって使用されていた可能性も考えられる。更に、遺物はカムイヤキ窯系陶片・青磁片・白磁片が主に出土しており、特に青磁片・白磁片が出土したことにより、当遺跡の時期をある程度限定することも可能である。

(木島・小山)

## 四、出土遺物

発掘した面積に比して出土量は少なく総量約500点である。攪乱層であるⅡ層以上を除くと出土は2号遺構覆土と1号遺構土坑内第7・8層に集中する。陶磁器・土器は細片が多数を占め、器形を復原できるものはほとんどなく、器形を推定する上で有意義なものも約100点にすぎなかった。なお当遺跡で石器の出土は見られなかった。

### 1. 陶磁器 (第11～14図、図版13下～15)

#### カムイヤキ窯系陶片 (第11・12・14図、図版13下・14)

カムイヤキ窯系の硬質無釉の陶片で、出土遺物の約70%を占める。器形を復原できるものはほとんどなく、口縁部の形態を中心に以下のように分類した。

A類 外反する口縁部と締った頸部をもつもので、外反したままのもの(A-I)

と二重口縁のもの(A-II)とに大別される。

B類 口縁部が短く直立し、そのまま張った胴部へ続くと思われるもの。

C類 内湾気味の口縁部をもち、頸や胴の区別がなく、そのまま底部へ続くと思われるもの。

るもの。

また、焼成の具合により、硬い質のものと脆い質のものに大別することもできる。前者は硬く締り、比重が大きく、色調は青灰色・灰色・暗い灰色・赤褐色等を呈する。後者はやや脆く、比重が小さく、色調は灰白色～明るい灰色を呈する。前者が大多数を占め、後者は稀である。両者とも断口が赤褐色や赤味を帯びるものが多く、石灰質と思われる粉末状の白い微粒子を含む。なお、器種との対応関係は不明である。

以下、各類の主なものについて記述する。

A 類 (1～13・16・18～21・28～42)

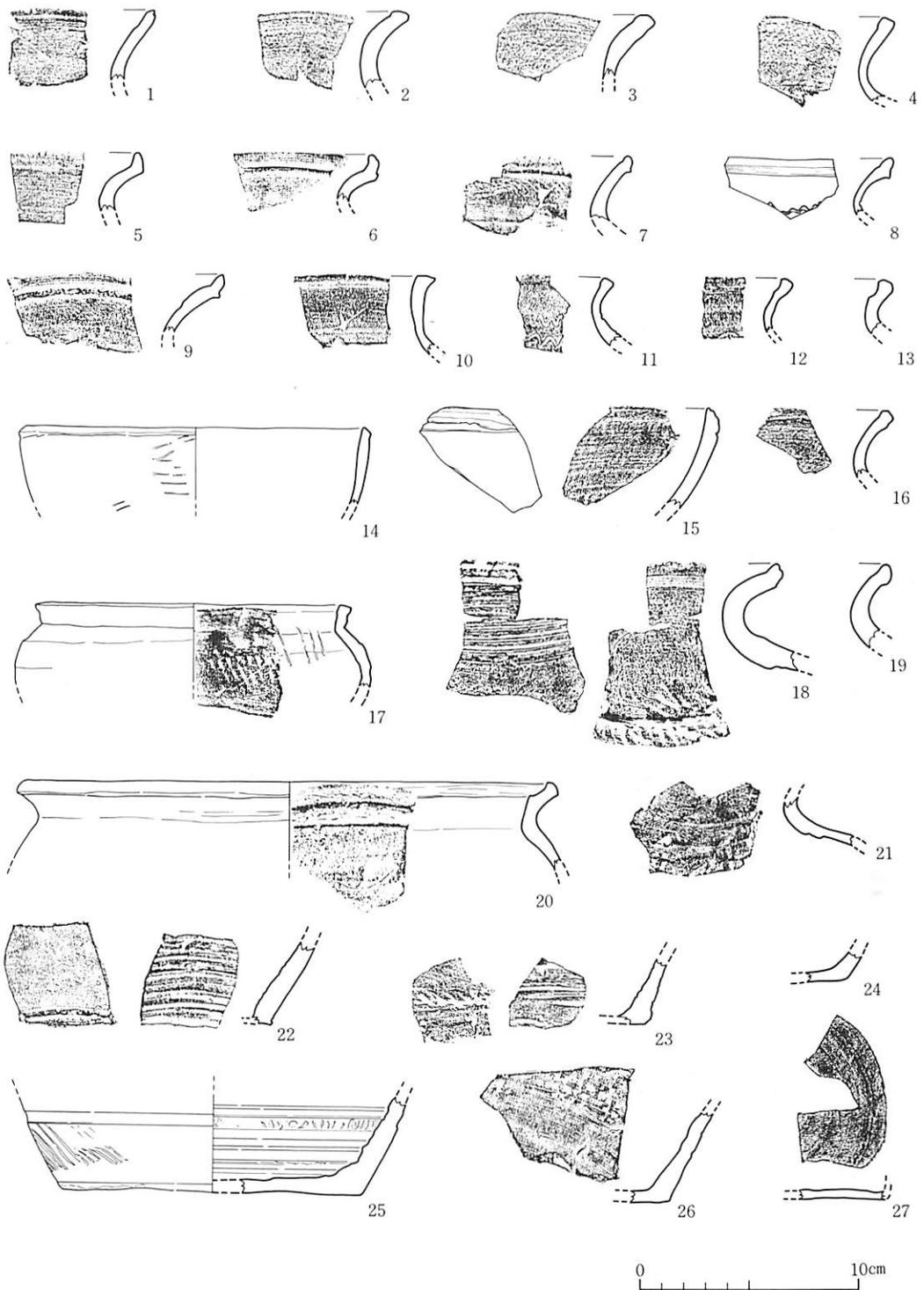
I (1～4・10～13・16・18～20)

一般に口唇部の内側は軽く凹みがちであるが、さらに強い凹みをもつもの(13・20)、口唇が平たく整形され、口唇部外側に鋭い稜を作り出すもの(10)もある。20は復原口径23.6cmをはかり「く」字を呈する屈曲部からあまり張らない胴部へ続くようである。11・12は比較的小形になると思われ、11は2条の波状沈線を施している。内外器面ともロクロによるナデ仕上げがみられるが、外器面に叩き痕をわずかに残すもの(2・3・4)もある。また18は内外器面に1mm程の条痕がみられ、下部には叩き痕が残る。すべて前述の硬い質のものに属すが、胎土に砂粒を含む粗い質のもの(19)もある。

II (5～9)

立ち上がりが内傾するもの(5)と立ち上がりを軽く凹ませるもの(6～9)とがあり、8は外器面に1条の波状沈線が施されている。内外器面ともロクロによるナデ仕上げがみられるが、外器面に叩き痕をわずかに残すもの(6・7)もある。焼成の具合は前述の脆い質のものが1点のみ(7)で、他はすべて硬い質である。

なお、胴部片(21・28～42)はすべてこの類に属すると思われ、これらは無文(21・28～31)と有文(32～42)とに大別される。内外器面ともナデ仕上げがみられるが、前者は粗雑であり、叩き痕が顕著に残るものが多い。後者は外器面は丁寧なナデ仕上げの後に施文されるが、内器面は外器面に比べて、雑な仕上げで、叩き痕を残すものが多い。また、施文部位は特に丁寧に仕上げられるもののようである。更に、後者には、波状沈線のみを施すもの(32・33・39)と平行沈線の間を波状沈線で満たすもの(34～38



第11図 カムイヤキ窯系陶片実測図(1)

表採; 14・15・25 I層; 1・2 II層; 5・7・9・17・21  
 1号遺構土坑内第6層; 13 1号遺構土坑内第7層; 3・18・22・23・26・27  
 1号遺構土坑内第8層; 8・16 2号遺構覆土; 4・10・11・12・19  
 2号遺構床面; 6 4号遺構覆土・1号遺構土坑内第7層接合; 20

・40～42) とがある。34～36・38・40・41は平行沈線の後に波状沈線が施文され、35・36・41は平行沈線間に間隔を有する。42は特に叉状の工具で施文される。29・40の2点が脆い質で、他はすべて硬い質である。

#### B 類 (17)

この類の陶器片は1点のみ出土した。復原口径11.4cmをはかる。張りの弱い胴部をもち、胴中央部から底部へ向ってすぼまるようである。内外器面ともに指によるナデ調整がみられるが、内面に叩き痕を残す。ロクロは使用していないようである。焼成の具合は脆い質に属す。

#### C 類 (14・15)

この類の陶器片は2点のみ出土した。口唇の外側に稜をつくるもの(14)・粘土帯を貼付するもの(15)がある。内外器面ともロクロによるナデ仕上げがみられるが、14は外器面に叩き痕を残す。14が脆い質、15が硬い質である。

#### 底部 (22～27)

底部はすべて、上述した分類のいずれに属するか不明である。すべて平底である。22・25・27は内器面にロクロ痕を残し、25は内外器面に叩き痕を有する。脆い質は1点のみ(24)で、他はすべて硬い質である。

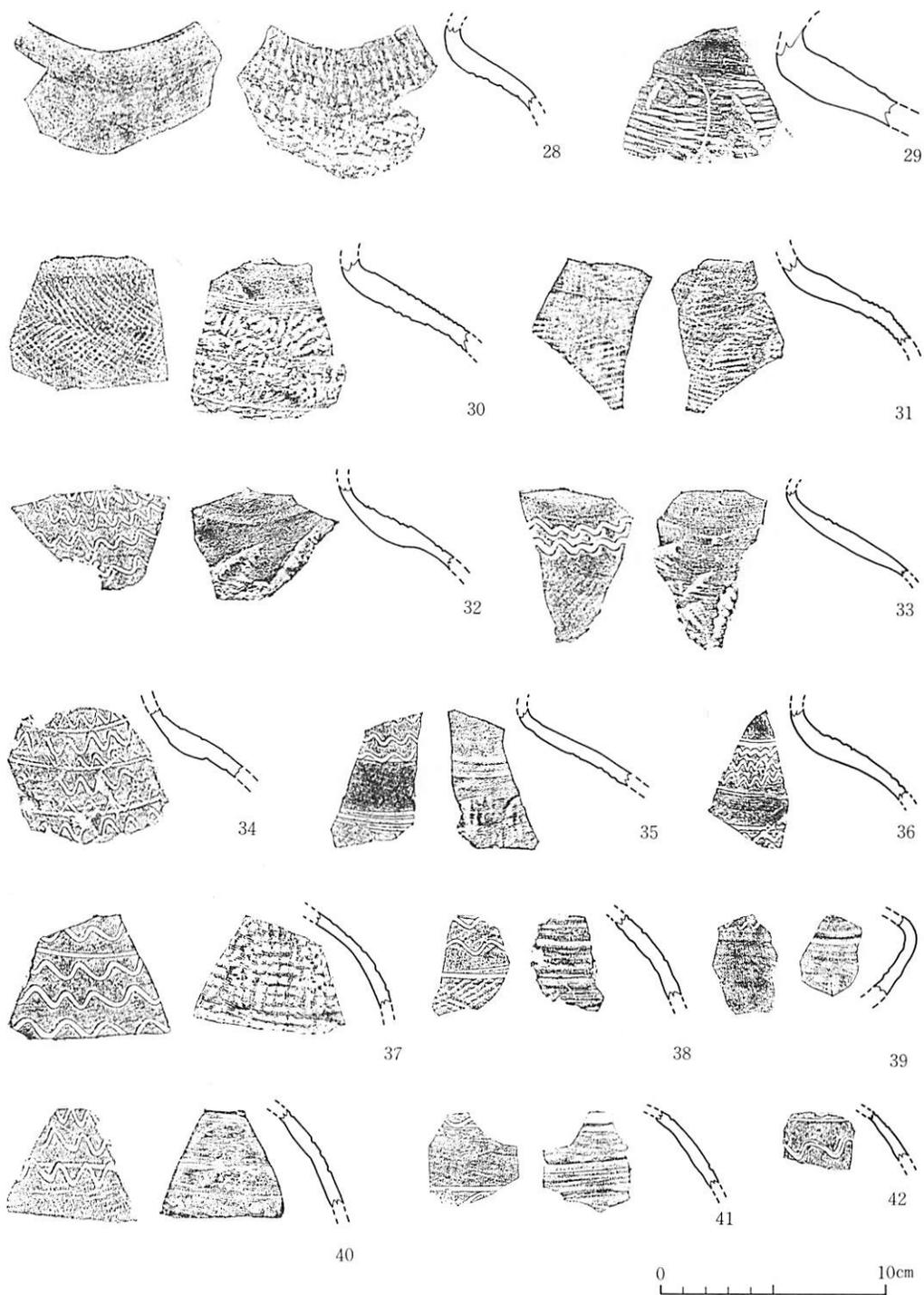
#### 把手 (74・75)

2点のみの出土である。橋状把手の一部であり、おそらく肩部に付くと思われる。これらは、指が通り易いように凹めた器面を跨いで横位に取り付けられていたと思われる。74は硬い質、75は脆い質である。

#### 赤焼きのカムイヤキ窯系陶片 (69)

酸化焼成の陶器片で、発色のよい橙色を呈する。カムイヤキ窯系の格子目の叩き痕が残っている。器形及び相当部位は不明である。胎土はきめ細かい質であり、白い微粒子を含み、良く焼き締まっている。意図された赤焼きである確証はないが、赤焼きの例は少なくない。

以上、各部位について述べてきたが、器種との関係についてふれると、A類1～13・18～21・28～42は壺もしくは甕の、B類17は鉢の、C類14・15は碗の一部であると思われる。甕・壺・鉢・碗の4器種に分け、大きさにより細分したカムイヤキ古窯址で



第12図 カムイヤキ窯系陶片実測図(2)

表採；29・34・38 1層；36・39

1号遺構土坑内第7層；28・37・42 1号遺構土坑内第8層；40

2号遺構覆土；31・32・33・41 2号遺構床面；30・35

の分類によると、当遺跡のA類、すなわち壺・甕のうち、壺は中・小形に属するが、甕の1つは大形に、他の1つは小形に属する。ちなみに、カムイヤキ古窯址では中・小形の甕は未発見である。B類はカムイヤキ古窯址の小形鉢、C類は碗にあたる。なお、器種構成で壺が圧倒的多数を占めることは、当遺跡の性質に関連して注目される。

#### 無釉陶器 (第13・14図、図版15)

54・76のみ図示した。54は内外器面ともにロクロ痕が残っており、胎土は淡黄色で後述の59に近い。

76は平底で厚手の底部片である。底の復原径は10cm前後、甕形になるものと思われる。内外器面ともにロクロ痕が残る。酸化焼成で、色調は橙色を呈する。

#### 磁器 (第13図、図版15)

出土した磁器類は、出土遺物の約10%を占める。

##### 白磁 (43・44・58)

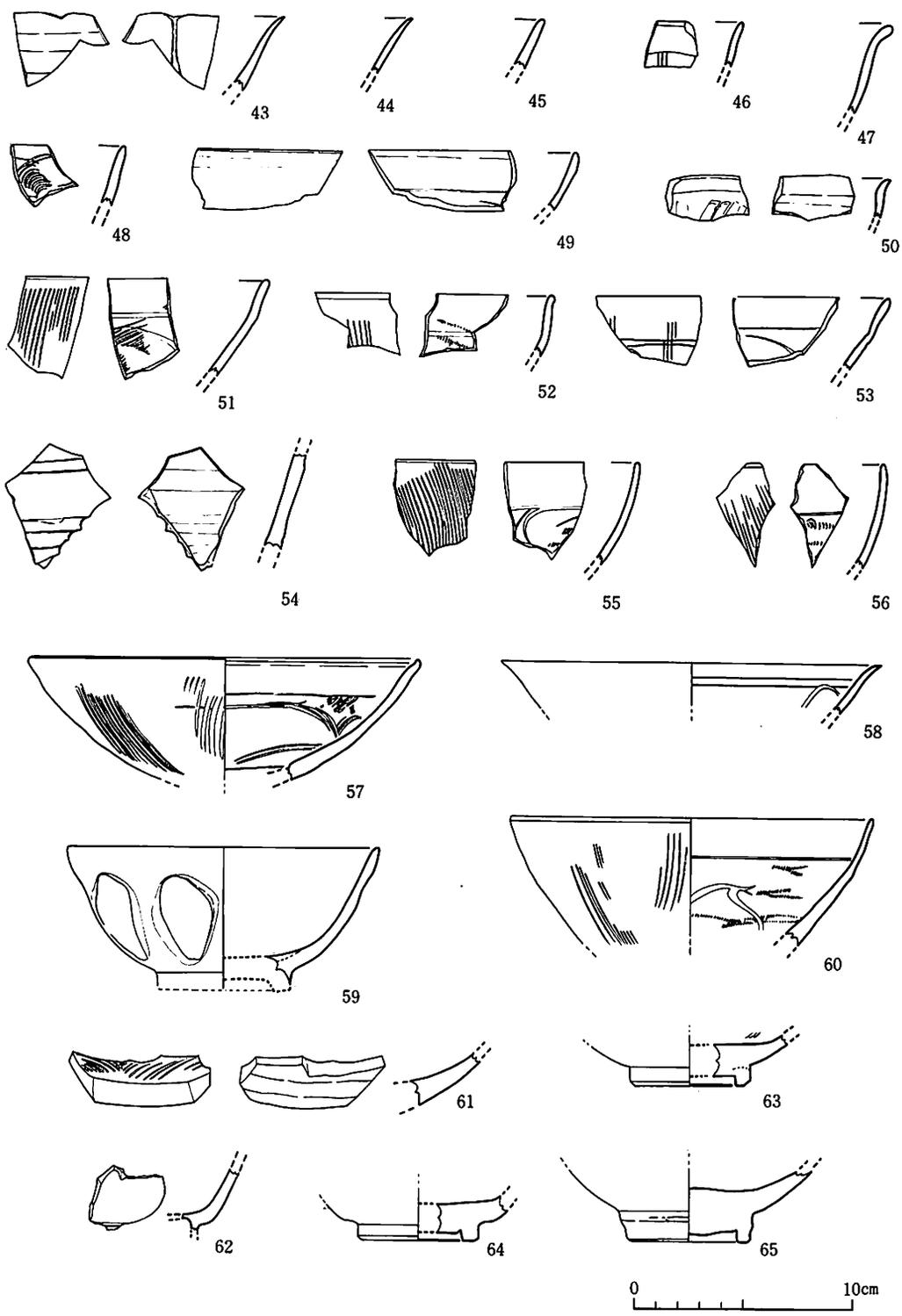
いずれも口縁部片であるが、細片であるため器形の復原は困難である。胎土は灰白色で、混入物がみられるが、緻密である。釉は非常に薄く、灰色を呈している。口縁部は、内器面に面取りがなされ、鋭くなっており、やや反っている。43は口唇に小さな刻目があり、輪花と思われる。内器面には削り出しによる線がその刻目から垂直方向に下っている。58には、粘土を薄くそいだ陰刻文の一部がみられる。

##### 青磁 (45～53・55～57・59～61・63～65)

47～49・51～53・55～57・59・60は碗の口縁部である。

胎土は59が淡黄色でやや粗く、その他は灰白色で緻密である。47は釉が明るい灰緑色を呈し、やや厚く施されている。細かい貫入がはしっている。口縁は外傾し、肥厚している。50は釉がオリブがかかった灰色を呈し、比較的薄く施されている。外器面に上下方向に粘土をそぎ落とし文様とした条線の一部がみられる。

49・51・53・56は釉が浅黄色を呈し、53には釉の発色にムラがみられる。比較的薄く施釉されている。内器面には、陰刻文の一部がみられ、外器面には縦方向の楕円描文がみられる。59は高台の一部を残している。釉はオリブがかかった灰色を呈し、内外器面に細かい貫入がはしっている。やや厚く施釉されており、高台の部分で溜りになっている。内器面には釉の発色のムラがみられる。外器面に陰刻の蓮弁文がみら



第13図 白磁・青磁・無釉陶器・染付実測図

表採: 45・50 I層; 46 II層; 48・52・62・64 III層; 55~57・63  
 1号遺構土坑内第6層; 59 1号遺構土坑内第7層; 43・47・61  
 2号遺構覆土; 44・49・51・53・54・60 2号遺構床面; 58  
 4号遺構4aピット覆土: 65

れるが、形状・大きさは、ともに不揃いである。底部が良く張っており、口縁部はそれほど開かない。外器面の一部にくびれた部分があるが、内器面には及んでいない。

57・60は釉が浅黄色を呈し、非常に薄く施されている。内外器面ともに細かい貫入がはしっている。60の内器面には、横方向の沈線と点を連ねて表現した雷光文と他の陰刻文の一部がみられる。57の内器面には、口端から2cm程下った部分と見込みに沈線があり、その間に陰刻文の一部がみられる。57・60の外器面は、幅約2cmの縦方向へ放射状にはしる櫛描文によって区画されている。

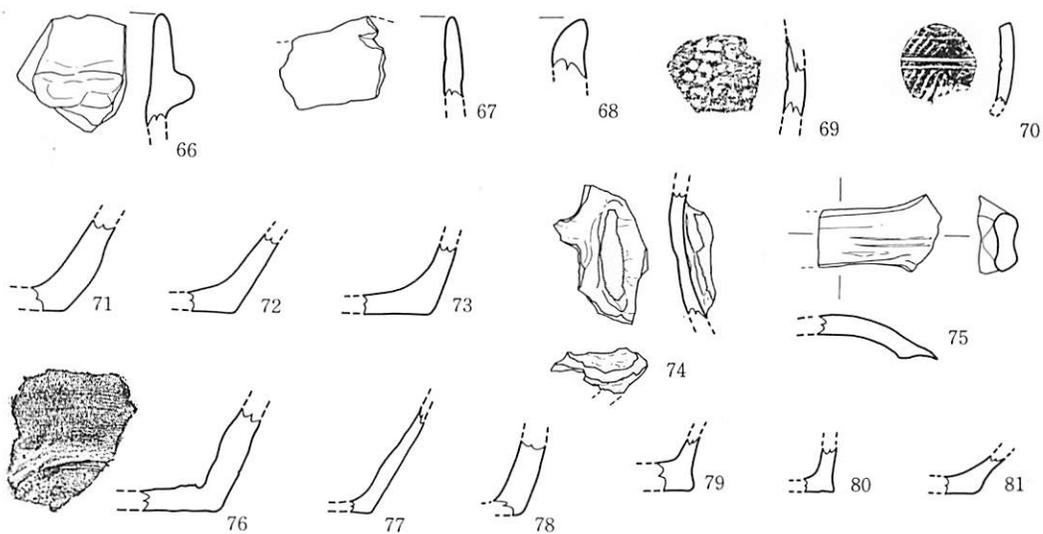
63～65は高台片である。豊付きと高台内部は、すべて露胎である。63は貼付によるものと思われ、陰刻文の一部が残っている。胎土は灰白色で細かい気泡がみられる。釉は灰緑色を呈しており、内外器面とも釉が煮えたような肌あれがみられる。64は削り出しによるものと思われ、高台と外底の接線は、特に稜をなすように鋭く抉り込まれている。胎土は淡黄色で細かな気泡がみられ、極めて緻密で貝殻状の断口をもつ。釉は灰色を呈し、光沢をもつ。65は削り出しによるものと思われるが、不自然な凹凸がある。胎土は灰色で、混入物が多く、細かい気泡がみられる。61は底部付近の破片である。釉はオリーブがかった灰色を呈し、やや厚い。内器面に櫛状の施文具をカーブさせながら引いた文様の一部がみられる。

### 染付 (第13図)

62の1点のみ。胎土が非常に純良で、純白に近い。底部の付け根に赤い顔料が、釉の上に焼き付けられている。比較的新しいものと思われる。

## 2. 土器 (第14図、図版14下)

土器は出土遺物の約20%を占めるが、細片が多数を占め、図示できるものも11点にすぎない。これには、胎土の粒子が細かく、わずかに雲母片・粉末状の白い微粒子を含んでいるもの(68・77・79・81)と、砂粒を多量に含み、胎土の質が粗いもの(78・80)と、これらとは性質が異なり、滑沢を有する土器(66・67・71～73)一手に持つと重く、冷たく、滑らかに感じられしかも一種の油沢を有するもの一とがある。前者は68の口縁部片を除くと、すべて平底の底部片であるが、79・81はわずかにくびれを



第14図 土器及びその他実測図

表採; 69・72・73・77・81 II層; 80

1号遺構土坑内第7層; 74 2号遺構覆土; 67・68 2号遺構2aピット覆土エ; 78

2号遺構床面; 66・71・75・79 3号遺構床面; 70 4号遺構4aピット覆土; 76

有する。色調は橙色・黄褐色を呈する。また78は外器面に、80は内器面に黒っぽく変色した部分がみられる。後者は66が把手状の突起を、67は山形の突起を有する口縁部片であり、71～73は平底の底部片である。色調は明るい橙色～暗い橙色を呈する。また71は外器面に黒っぽく変色した部分がみられる。

### 3. 土製品 (第14図、図版14下)

円盤状土製品で、1点(70)出土した。推定径約3cm、厚さ約5mmをはかる。硬質のカムイヤキ窯系陶片を使用し、研磨して周囲を整形している。表面はもとの調整をそのまま残しており、色調は灰色を呈する。用途は不明。

### 4. 黄褐色の塊状粒

これは、2号遺構のピットを伴う掘り込みの北東部の、長径約3m、短径約1.5m

の楕円形状の範囲内に散在していた直径1～1.5cm、重さ1～2gの指頭大の塊状粒である。表面には凹凸があり、触るとザラザラした感じがする。表面の色調は黄褐色を呈する。砕いてルーペで内部を観察すると、この黄褐色部は薄い殻のように全体を包んでおり、その内部は黒褐色の細粒子が団塊状に固まった様相を呈し、その間隙にキラキラ光る物が散見される。この塊状粒から細粒子をほぐしてみると、わずかながら磁性を帯びる黒い物と透明な物とがある。また、この細粒子を偏光顕微鏡で観察すると、SiO<sub>2</sub>（シリカ）と思われる物の中にガラス質と結晶質の両種が共存していた。これらの観察結果から推定すると、この塊状粒には酸化鉄（マグネタイト）を含んでいる可能性があり、また、この塊状粒が急速な加熱、冷却等のような操作を受けた可能性があるものと考えられる。（岡・藤崎）

#### ※滑沢を有する土器片の顕微鏡による観察結果

今回出土した土器片のうち、“手に持つと重く、冷たく、滑らかに感じられ、しかも一種の油沢のある”ものが含まれていることを述べたが（36頁参照）、これらの土器片について、含有鉱物の同定を試みた。

試料は1号遺構土坑内第7層出土のものを用い、①双眼実体顕微鏡による観察 ②プレパラートの偏光顕微鏡による観察を行なった。

これらの観察の結果、土器片中には石英・蛇紋岩片が確認された。なお、双眼実体顕微鏡下では、滑石と思われる鉱物の小片が多数観察されたが、偏光顕微鏡下では確認できなかった。（馬原）

註 伊仙町教育委員会「カムイヤキ古窯跡群Ⅱ」 1985

## 五、まとめ

今回の調査は奄美では初めてのグスクの発掘調査であった。それぞれの結果についての対比資料がなく、順を追った立論は困難である。以下、感想程度のことを手当りに述べて“まとめ”に代えたい。

## 1. 玉城の地形について

玉城は湿地と崖によって周囲から孤立した台地であるが、人為的に崖の一部を削る等して、防御的な性格を強調した証拠は発見できなかった。また、発掘地点が一番高く、次いでノロ墓の辺りが高くて、この2つの間が鞍部となっていたため発掘地点はやや独立の様相を帯びた高地点であったという。しかし、これらの部分についても最高所である発掘地点一帯が施設を伴う平場であることが判明した以外に、最近の大型機械の導入以前に何らかの地形変更の工事がなされた証査は得られなかった。ただ発掘地点の北の縁に石が並んでいるのが発見されたが、崖の肩の崩落を押える程度のものであると思われる。

## 2. 各遺構についての所見

### a. 1号遺構

在地の古老にこの遺構を見ていただき、何を連想するか答えてもらったところ、Kumuiを連想した方、それに賛同した方がおられた。水の得難い高台の住居では、土質の良い地点に穴を掘って水を溜め、周囲を茅などの深い藪にして囲い込み、炊飯等の用水に供したのがKumuiであるとのことである。水道完成以前のKumuiの跡がいくつか現存しており、1号遺構とも類似する。ちなみに、この辺りの発音からはr音が脱落するとのことで、例えば伊仙町ではKumuriと言う。つまり“隠り井”である。1号遺構が隠り井である可能性は高いと考えられる。

### b. 2・3・4号遺構

2号遺構は難解な遺構である。その外部を成す溝は南から北にわずかに傾き、その内面は比較的清潔に維持され、2ヶ所で屈曲していた。屈曲の角度は120～130°で、もし一巡していたとするなら六角形の可能性が強い。また、もし2aピットが寄せ棟の4本柱の1本の跡であれば、2号遺構は内側に雨じまいの溝をもつ大型の葺き下し家屋の可能性が出てくる。

2号遺構の内部をみると、多数の柱(杭)穴、2ヶ所ある3条1組の浅く短い溝状の凹み、かなり大がかりで長期間の火の使用の跡、完全燃焼を繰り返した白い灰の層、床面の黄褐色の塊状粒の散在等が印象的である。3条1組の溝状の凹みは重量物を支えた台の跡であるかもしれない。これについては旧式の砂糖絞り機の台の跡に似てい

るという意見もあった。このことと、草本かせいぜい粗朶を用いたと思われる大きな火の痕とはよく符合する。また隠り井の存在もこの符合を補強する。ただし、台の跡や火の痕が狭い範囲に重なり合うこと、火を囲う土壁等の跡が見当たらないこと等、上記の符合には、はなはだ不都合である。また、この地形上で砂糖関係の施設を想像することの困難さはどの古老も説くところである。更に、奄美大島の直川智が福建から甘蔗をもたらしたのが1610年頃とすれば、後述の年代推定とも大きく食い違ってしまう。滑石を混入した可能性のある土器や床面に散在していた黄褐色の塊状粒を考慮のうちに入れるとすれば、現在は農道で削り去られてしまった地点で金属に関係する何らかの作業が行なわれた可能性も皆無ではない。

1・2・3号遺構とも共通の覆土におおわれており、その時期はほぼ同時期と推定される。したがって、3号遺構は2号遺構に付属する何らかの設備であると思われる。なお1号遺構と4号遺構から接合可能な同一遺物の破片が出土しているので、これもほぼ同時期に存在したとして良いであろう。4号遺構がいくつかの点で2号遺構に類似していることは各論で述べた通りである。また、2・3・4号遺構が少なくとも2度以上の建て替えないし修理の様相をとどめていることもその使用期間に関連して注目される。

以上全体の遺構についていくつかの可能性を追求してみたものの、その可能性を具体的に立証することは現時点では難しく、奄美のグスクの調査例の増加を待つ他はない。しかし、グスク地名の明確に残る地点において、かなり大がかりな構築物の存在が確認されたこと、それに付属するいくつかの事実が指摘された意義は必ずしも小さくないと考えている。

### 3. 遺物についての所見

若干の例外を除き、ほとんどの遺物は陶磁器で、このうちの約70%がカムイヤキ窯系の陶片である。器形は鉢の1点及び、表採の碗2点を除けば、その他はすべて甕と壺である。壺が大多数で、しかも、中形・小形の2系に分けられることも興味深い。無文や直口口縁に近い破片もあるが口縁部が強く反りながら肥厚するものが半ば近く、文様も綾杉状の叩き文や1本描きの波状文等のものがある。この様相は金武正紀氏の<sup>註2</sup>編年の12世紀末～14世紀に相当する。

磁器は全体の10%程度であるが、江南系の青磁が大半である。判別のつくものはいずれも口径15～20cm程の灰色がかった黄緑色の碗形の粗器である。蓮弁などの便化が著しく、13世紀以後になるのであろう。共通して口唇部に使い傷が認められ、一定期間の常用を想像させる。

土器で注目されるのは滑石を混入した可能性のある一連の破片である。南西諸島で滑石に関係する遺物といえば、滑石製の石鍋と滑石を混入したとされている滑石混入土器とがある。

石鍋は長崎県西彼杵半島を中心に製作され、その流通時期は平安時代半ば頃から室町時代にわたる。<sup>註4</sup>北は関東から南は八重山地方まで分布するが、南西諸島ではカムイヤキ窯系の陶片・中国の陶磁片等と共に発見されることが多い。カムイヤキ窯の活動期については11～13世紀にわたる数値が得られているが、金武氏の検証では14世紀の遺跡から出る型のもものも焼かれているという。<sup>註5</sup>もし両者の並行関係が一貫しているとするなら、その流通年代も今のところ、この幅で考えなければならない。<sup>註6</sup>

一方、滑石を混入する土器は九州の縄文時代前・中期のものが有名で、曾畑式土器は南島にも関連するが、当面の滑石混入土器はそれとは時代を隔絶した前述の石鍋と関連する形で出土する。それらは平底もしくは鍋底形で口縁部は肥厚しないまま、真直ぐに立ち上がり、立方形のかなり頑丈な四耳をもつのが普通である。これは一連の遺跡の中でも時代の下り気味の遺跡から出ることが多いようで、12～14世紀の印象を受ける。

石鍋と滑石混入土器との関連についても、金武氏の考証があり、<sup>註7</sup>石鍋片を削って、その粉末を混入したものであること、石鍋を再生しようとしたものであること等が指摘されている。玉城から出土した土器もこれらの滑石混入土器と一連のものであるが、前述のように滑石混入の事実が完全には実証されず、かえって蛇紋岩片の混入が実証されているので、この方は滑石原石の移入とその混入の可能性を残していることになる。類例の増加を待ちたい。ただ、その用途については、その耐火性のゆえに前段に述べた金属操作の可能性をわずかに残すものの、カムイヤキ窯系陶片が甕・壺であり、江南の磁器が碗・鉢の類で構成されているので、一連の土器は調理に関するものと理解すれば、保存・盛食・煮沸の三形態が出揃うことになる。ただ、三形態の出揃

いが玉城における人間の作為のどういう場面を意味しているのかは今のところさだかではない。それにしてもなぜ機能の異なるものを異なった産地から取り揃えるのか。考えられることは、火を用いるには陶磁器より土器に利点があり、また食物を清潔に処置するためには磁器が最も便利で、保存の能力については、その対象物にもよるが、水を容易には通さないのに空気の出入りの比較的自由なカムイヤキ窯系陶片が格段に優れているわけで、この玉城に関わりのある人々が既にそのことを知っていたばかりでなく、必要なものだけを各地から選択的に取り寄せるだけの交易の実力を持っていたことが窺える。

#### 4. 玉城遺跡の遺構の時期

玉城遺跡の年代が判明すればグスクの研究に利するところが大きい。幸い、概略ながら時期を示すいくつかの資料を得ることができた。前述の順に挙げれば、まずカムイヤキ窯系の陶片、これは12～14世紀。次いで磁器は便化が見られるため13世紀以降の推定、滑石混入の可能性のある土器は結局のところ滑石混入土器と一連のものであるので、12～14世紀に包摂される。ほとんどが各遺構をおおった共通の覆土の下から検出され、しかも離れた遺構相互で接合できる資料が発見されており、遺構も遺物も一時代のものであることを示している。よって、玉城遺跡の遺構の年代は13～14世紀の可能性が大きいことになる。

(馬原・友口)

註1 小林正秀「第四編 薩藩時代」『天城町誌』 1978

註2 金武正紀「シンポジウム南島の須恵器」資料 1986

註3 大瀬戸町29ヶ所、外海町24ヶ所、西彼町9ヶ所、西海町3ヶ所、琴海町2ヶ所と、現在確認されているほとんどの製作址がここに集中する。

下川達彌編「滑石製石鍋出土地名表（九州・沖縄）」『九州文化史研究所紀要第29号』1984

註4 大瀬戸町ホゲット第6製作址におけるC-14年代測定値は、 $915 \pm 70$  y B.P.、 $970 \pm 100$  y B.P.であり、福岡市海の中道遺跡では10世紀代の遺物と共に出土している。これらは現時点で最も古い資料である。

また下限については、16世紀の文献に石鍋の記載があることが指摘されている。

註3文献及び正林護・下川達彌「滑石製石鍋の炭素測定値」『長崎県埋蔵文化財調査集報IV』 1981

福岡市教育委員会「海の中道遺跡」 1982

註5 38頁註に同じ

註6 註2に同じ

註7 沖縄県教育委員会「恩納村熱田貝塚発掘調査ニュース」 1978